

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第7号

特集： 歴史漫画『斎藤新五利治』の誕生

～地域と高校生の協働～

- ・ 序 歴史漫画発刊にあたって
岐阜県立関高等学校長 林 雅浩 2
- ・ 「月岡野の戦い」の検証と創作活動への応用に関する試論
～歴史漫画『斎藤新五利治』の制作をめぐる～
田中莉子 藤村彩須果 杉浦良太郎 鈴木遥斗 梅村颯太郎 酒向達也 大竹諒
平山華音 亀山湧也 杉浦ひのか
..... 3
- ・ 斎藤新五利治の実像への思索
富加町教育委員会 文化財専門官 島田崇正 14
- ・ 文献史料等に見る加治田城主斎藤新五利治
富加町役場総務課 山内正明 16
- ・ 姉小路氏城館跡と越中西街道について
飛騨市教育委員会 係長・学芸員 三好清超 22
- ・ 『夕雲の城』プロジェクトの経緯と展望
岐阜県立関高等学校 林 直樹 28
- ・ 過去の公式ウェブ情報 30
- ・ 後 記 50

2023年3月31日

歴史漫画特集号発刊にあたって

岐阜県立関高等学校長 林 雅浩

このたび、歴史漫画『斎藤新五利治』が、富加町教育委員会より発刊される運びとなりました。この漫画の制作にあたっては、地域研究部・文芸部の生徒が企画段階より深く関わっています。

今回の『地域研究部研究報告』は、歴史漫画発刊を記念して企画・編集されており、生徒のレポート、研究活動を支えてくださった学芸員の方々の研究論文、地域と連携した本校の研究活動のあゆみを一挙掲載しています。

漫画の主人公斎藤新五利治は、織田信長・信忠父子の側近として活躍した武将であり、本能寺の変で討死するまでの十五年間、現在の富加町加治田を拠点に、関市、美濃加茂市及び加茂郡一帯を統治しました。戦場での活躍ぶりに比べ、なぜか知名度は低く、小説やドラマに登場することはありません。

令和元年夏以来、戦国時代の史跡に関する合同調査を続けてきた富加町と関高等学校は、このたび、郷土の戦国武将である斎藤新五利治の事績を丁寧に追い、その激動の生涯を広く周知することを目的とし、漫画家の渡辺浩行先生とともに一冊の歴史漫画にまとめました。

文献を調べつつ、郷土に残る加治田城や堂洞城、関城はもちろん、富山県にまで現地踏査に出かけ、話し合いを重ねながら、ストーリーを練り上げていく仕事は、やり甲斐はあっても、多くの困難を伴うものであったに違いありません。史実を重んじる地域研究部と、創作を行う文芸部のスタンスの違いから、時に熱い議論が交わされたとも聞いています。

そうした努力の成果は、本校生徒が担当した「月岡野の戦い」の場面の随所に現れています。ぜひ漫画を手に取り、史実と創作の織りなす漫画本編、学芸員の方々の巻末論文、及び本校文芸部員の巻末エッセイを、堪能していただけたら幸いです。あわせて本誌のレポートや研究論文をお読みいただくと、「斎藤新五とその時代」への理解を一層深めていただけるものと確信いたしております。

末尾となりましたが、高校生の自主性を重んじつつも、温かなご指導で活動をささえていただいた渡辺浩行先生、令和元年以来ご指導をいただいている富加町教育委員会文化財専門官の島田崇正様をはじめとし、関係諸機関の皆様方に深甚なる謝意を表し、ご挨拶といたします。

令和五年三月吉日

「月岡野の戦い」の検証と創作活動への応用に関する試論

～歴史漫画『斎藤新五利治』の制作をめぐる～

岐阜県立関高等学校地域研究部・文芸部

田中莉子 藤村彩須果 杉浦良太郎 鈴木遥斗 梅村颯太郎 酒向達也 大竹諒
平山華音 亀山湧也 杉浦ひのか



月岡野古戦場推定地の風景(2022.7.28)

目次

はじめに

活動にいたる経緯

1. 歴史観光「夕雲の城」ツアーの構想
2. 自治体や地元企業との連携
3. 歴史漫画『斎藤新五利治』と月岡野の戦い

活動実践の報告

1. 史料にみる月岡野の戦い
2. 富山県フィールドワークと史料・古戦場の検討
3. 「月岡野の戦い」のシナリオ制作の経緯
4. 漫画主人公の人物像構築
5. 武将としての新五を探る

むすびにかえて ～歴史探究と歴史を生かしたまちづくり～

はじめに

岐阜県中濃地方は、織田信長による東美濃攻略作戦の舞台でもある⁽¹⁾。我々地域研究部は富加町教育委員会と連携し、2019年以降、東美濃攻略戦に関する文献や関連史跡の調査を進めてきた⁽²⁾。フィールドワークを重ね、数々の文化財を実見し議論を深めるうちに、地元に残る素晴らしい文化財の価値を、もっと多くの人々に知ってもらうためにはどうしたらよいか考えるようになった⁽³⁾。

普及活動に関する様々な活動に取り組んでいる富加町では、東美濃攻略戦をテーマとした歴史漫画『夕雲の城』『猿啄の春』を刊行し、近隣市町を含む地域の小中学生への無料配付及び希望者への販売を行っている⁽⁴⁾。この漫画シリーズの特徴は、漫画の中にフィクションを交えながらも、郷土史・考古学の研究者が執筆した資料編が巻末に付されているところにある。読者は、学術検証の現状を把握しつつ、創作文芸を楽しむことができる仕組みになっている⁽⁵⁾。地域研究部・文芸部員の中には、小学生の頃、『夕雲の城』を読んで、郷土の歴史に関心を持つようになった生徒が複数いる。富加町の歴史漫画制作の意図は、成功していると言えるのではないか。

活動にいたる経緯

1. 歴史観光「夕雲の城」ツアーの構想

2020年、我々は、より多くの人々に、地域の文化財を広く深く知ってもらうための手立てとして、歴史観光「夕雲の城」ツアーを構想した。名称はもちろん歴史漫画のタイトルにちなむ。折しも、美濃加茂市・富加町・坂祝町の3市町が主催するオンライン歴史イベントが開催されることとなり、我々もイベント企画の段階から参画することとなった。

イベント当日(2021.3.28)は、信長の東美濃侵攻ルートを、木曾川下りとバス周遊で楽しむ企画を発表し、自治体側からも好評を得た⁽⁶⁾。その後、旅行会社や自治体との討議を重ね、ズームを活用したバーチャルツアーを企画し実験も行った⁽⁷⁾。その結果をまとめ、日本考古学協会総会高校生ポスターセッションで発表した(2021.5.28)⁽⁸⁾。さらにラフティングボートによる川下りからの古戦場・山城遠望や、古戦場や山城のドローン撮影などを試み、全国高等学校郷土研究発表大会でも研究成果を発表した⁽⁹⁾。

2. 自治体や地元企業との連携

我々の研究が地域から注目を受けた背景には、文化財保護法改正にみられるような、文化財をまちづくりや観光振興等に積極的に活用しようとの動きがあると考えられる。従来、自治体の行う文化財行政の主眼は、文化財保全や調査研究、社会教育への活用に置かれていたが、今日では、文化財をまちづくりの核として据える考え方が主流になりつつあるという。確かに重要な観点ではあるが、文化財の活用を、過度に経済振興や観光振興と結びつける価値観には違和感を覚えざるを得ない⁽¹⁰⁾。

そのような社会的潮流の中で、学術的研究と歴史漫画の双方を駆使し、バランス感覚ある普及活動を行っている富加町の活動に触発され、我々は「夕雲の城」ツアーを構想するにいたった。

我々の活動に関心を持ってくださった富加町や美濃加茂市、旅行会社やリバースポーツ運営会社の方々と、何度も話し合いやフィールドワークを重ねていく中で、「夕雲の城」ツアー構想の中から、ふたつのアイデアが実際に事業化されることになった。そのひとつが富加町と連携した歴史漫画第三弾の制作事業であり⁽¹¹⁾、もうひとつが美濃加茂市と連携

した「木曾川下り復活プロジェクト」である⁽¹²⁾。本稿の目的は、前者の事業の経緯と成果、今後の展望を述べることにある。後者の事業に関しては後日改めて論じたい。

3. 歴史漫画『齋藤新五利治』と月岡野の戦い

永禄8(1565)年、東美濃攻略作戦は、堂洞城と関城の陥落によって一応の終息を見せた。結果、織田信長の側近であった齋藤新五利治(以下、新五と呼称する)が加治田城(富加町加治田)の城主となり、加茂郡・武儀郡とその隣接地域を支配することとなった⁽¹³⁾。

新五の出自に関しては諸説あるが、近年では齋藤道三の末子説が有力視されている⁽¹⁴⁾。信長の側近となった新五は、近江浅井攻めや石山戦争、伊勢長島一向一揆制圧など重要な戦いに出陣した⁽¹⁵⁾。信長・信忠父子の書状や『信長公記』の記載から、新五が有力な武将であったことは間違いなく相当な信頼を得ていたことが窺われる⁽¹⁶⁾。のちに信忠に仕え、本能寺の変に際し二条新御所で討死した⁽¹⁷⁾。

新五の生涯の中で最も注目される合戦は、月岡野の戦いである。天正6(1578)年、上杉謙信が死去すると、信長はこの機を逃さず越中攻略をめざし、まずは越中出身の神保長住を送り込み、さらに新五率いる濃尾勢を派遣した。月岡野の大勝により織田方は越中支配を固めることができたため、信長・信忠は相次いで新五に書状を書き送っている。

今回の漫画制作にあたって、漫画家の渡辺浩行氏から我々に対し「月岡野の戦い」のシナリオ執筆の大役が課せられた⁽¹⁸⁾。漫画全体のおよそ4分の1、しかも新五の生涯の中でもハイライトといえるできごとである。我々は、シナリオ執筆にあたって話し合いを重ね、以下のことを心がけることにした。

- 1) 書状や宛行状などの一次史料、良質な史料と評価される『信長公記』をもとに、月岡野の戦いや新五の事績をできる限り詳細に調べ、戦いの推移や意義を実証的に検討する。さらに現地に残る城跡や古戦場跡を実際に訪ね、地形や史跡の現状を確認する。
- 2) 新五が城主を務めた加治田やその周辺、新五が攻略した越中には、新五に関する軍記や伝承が今も残る。こうした伝承についても検討を加える。
- 3) 史料により新五の実像を浮かび上がらせると同時に、伝承や当時の社会情勢をもとに、想像力を働かせながら、漫画の主人公としての新五の人間像を構築する。
- 4) 漫画である以上、当然ながら史実の間隙にフィクションを交えることになるが、史実を捻じ曲げるようなことは避ける。あわせて、漫画巻末の研究論文や史料により学術的な知見をわかりやすく提供し、虚実の境をはっきりとさせる。

活動実践の報告

1. 史料にみる月岡野の戦い

基礎史料である『信長公記』(以下『公記』と略)の記載は以下の通りである⁽¹⁹⁾。

- (1) 天正6(1578)年9月、新五は信長の命を受け濃尾の兵を率いて越中に出陣した。
- (2) 津毛城には上杉方の河田長親・椎名道之(長尾景直)が籠っていたが、濃尾の兵の到来を知り今泉城に退いた。津毛城は織田方の神保長住が占拠した。
- (3) 10月、新五は太田本郷城を拠点に今泉城と対峙し、今泉城の城下に火を放った。
- (4) 未明、織田方は上杉方を難所に引き付け、月岡野で敵の首360を打ち取った。
- (5) 生け捕った人質は神保長住に引き渡し新五は自陣に帰った。

大勝利を得た新五を信長・信忠父子は絶賛し、前掲の通り、それぞれが新五宛ての書状をしたためている。文面にある「三千余人討捕候条、粉骨之段無比類、感情不浅候、誠天下之覚可然候」(信長朱印状)、「首三千余打捕之由、是無比類仕合、令大慶候」(信忠書状)

の文言からは、信長父子の興奮ぶりが伝わってくると同時に、実際の戦果がかなり誇張され喧伝されている様子がわかる。

2. 富山県フィールドワークと史料・古戦場の検討

2022年7月28日、漫画家の渡辺浩行氏、富加町教育委員会の島田崇正氏とともに、月岡野の古戦場や関連史跡の踏査のため富山県を訪れた⁽²⁰⁾。萩原大輔氏(富山市郷土博物館・日本中世史)や堀内大介氏(富山市埋蔵文化財センター・考古学)から、月岡野の合戦や当時の越中の様相についてのお話をうかがう貴重な機会を得た。さらに、富山城、今泉城、太田本郷城、円光寺(新五の菩提寺)、的場の清水(新五にまつわる伝承地)、津毛城、月岡野古戦場をめぐり、帰路、飛騨神岡の江馬館跡を訪ね、屋形城の復元状況を見学した。

萩原氏からは、月岡野の戦いに関する新解釈をうかがった⁽²¹⁾。従来の説では、前掲『公記』(1)下線部の城下に放火した主体を斎藤勢とみなす。これに対し萩原氏は河田長親が自ら火を放って退散した解釈する。すなわち斎藤方に拠点を与えないための戦術、「自焼没落」である。さらに、前掲『公記』(4)下線部の難所に引き付け(原文:節所へ引かけ)を「難所に追い込み」と解釈し、一般的な解釈である「敵を難所におびき寄せて討つ」のではなく「敵を難所に追い込んで討つ」と新たな解釈を下している。

従来の説と萩原氏の新解釈のどちらがより妥当性があるか。我々は実際に古戦場や城跡をめぐって考えた。今泉城に関しては、高岡徹氏の論考を参照に現地を訪ねた⁽²²⁾。古地図や地形から復元される今泉城は、堀に囲まれた屋形城(やかたしろ)であり、推定地は微高地の端部に立地する。今泉の地名は扇状地端部の湧水地を意味するものに違いない。

一方、新五が拠点とした太田本郷城は、その一部が発掘調査によって解明されている⁽²³⁾。こちらにも堀を有する屋形城である。今泉城から見ると、太田本郷城は東南方向に位置し、ふたつの幹道の交差点付近であると同時に、鼬川を利用して富山城方面に抜けられる交通・水運の要衝に位置する。萩原氏や堀内氏は、「自焼没落」後に北東の新庄城方面をめざす河田勢を、新五の軍勢が先回りして南方へと追い詰め、さらに南方の津毛城に陣取る神保勢と計らって、月岡野で挟み撃ちにしたと推測する。新旧どちらの解釈が妥当か決しがたいが、地図を見て実際に現地を歩き、今泉城、新庄城、太田本郷城、それらを結ぶ幹道の位置関係を考えると、新解釈がより妥当であるように思えた⁽²⁴⁾。

神保長住が拠点とした津毛城は、熊野川と黒川の合流点の東側にあり、川に挟まれた台地の西端に築かれていたと推測される。地理的に見て、飛騨街道をおさえる重要拠点であったにちがいない。現在は福沢小学校の校庭となり、遺構のほとんどが滅失しているが⁽²⁵⁾、一度は越中を追われた神保氏が捲土重来を期した城であると思うと感慨深かった。

3. 「月岡野の戦い」のシナリオ制作の経緯

史料調査とフィールドワークを終えた我々は、まずは各自で戦いの推移を再構成し、独自のシナリオ案にまとめた。完成したレポートはグループLINEで共有し、渡辺氏、島田氏にも提出した。各自がまとめたシナリオ案は、合戦想定図を添付したもの、戦いの局面を史料や地形描写を駆使し時系列に沿って詳述したもの、セリフ入りの本格的なものなど様々であったが、これを一本のシナリオにまとめあげるため、渡辺氏・島田氏を交えた会議を行った。学術的検証で裏付けられる史実を連ねただけでは、作画のためのストーリーにはならないので、史実の間隙に推測に基づく創作を挿入しなければならない。細かな議論を重ね、我々は以下のような推論をシナリオに交えることにした。

(1) より説得のある説として上杉勢による「自焼没落」説を採用する。

(2)「自焼没落」はあらかじめ計画されてことではなく、偶発的に起こったとする。

(3) 織田勢の越中討ち入りに関しては、元々の支配者であった神保長住の生国帰還を果たすことを大義に掲げたと考える。そうであれば、召し捕った捕虜を神保に預け、新五が帰還した理由の説明にもなる。

4. 漫画主人公の人物像構築

漫画の主人公である以上、新五の人物像を具体化しなければならない。一次史料や『信長公記』にあらわれる新五の姿はおおむね以下の通りであろう。

- ・織田家臣団の一員として、多くの戦いで戦歴を重ねた有能な武将であった。
- ・主君の信長や信忠からの信頼は厚かった。

史実の探究を旨とするものであれば、結論はこの程度でとどめておくべきだが、今回のプロジェクトの性質上、美濃や越中に残る伝承や後世の軍記を参考に、具体的な人物像を描かねばならない。史実からわかる新五像を損ねないように、以下の伝承・軍記のエピソードをもとに、新五の人物像を構築した⁽²⁶⁾。

- ・信長の中国攻めに際し京都まで馳せ参じた。直前まで病に伏していたため、主君からの出陣要請はなかったが、忠義に厚い新五は駆けつけた。『南北山城軍記』。
- ・正室（佐藤忠能の娘）を愛し側室を持つことはなかった。家族愛あふれる人物で、京都に旅立つ時には妻子と涙の別れとなった（『南北山城軍記』）。
- ・娘蓮与の皮膚病を癒すため利根神社に願掛けをしたところ、的場の清水により治癒がなかった（富山に残る伝承）。
- ・太田本郷城付近にある円光寺（浄土真宗）は新五の菩提寺であり位牌も残る。本能寺の変で討死したあと、遺髪が寺にもたらされたという（寺伝）。

興味深いことに、美濃はもちろん敵地であったはずの越中でも、新五への好意的な伝承が残されている。以上のエピソードはいずれも実証性に乏しく史実とは認めがたいが、漫画の中に盛り込むこととした。

5. 武将としての新五を探る

『公記』には、新五が伊勢大河内（1569.8）、近江小谷（1570.6）、摂津野田・福島（1570.9）、河内交野（1572.4）、山城槇島（1573.7）、伊勢長島（1574.7）、加賀（1577.8）、越中（1578.9）に参陣したことと、本能寺の変（1582.6）に際して討死したことが記録されている。

織田家における新五の立場は、柴田勝家や明智光秀、羽柴秀吉のような国持大名クラスの方面軍司令官ではなく、馬廻衆として各地を転戦する遊撃隊司令官として活躍した人物であったと想定されている⁽²⁷⁾。新五が馬廻衆であると指し示す直接的な史料はないが、畿内や北陸の戦場を転戦していること、二郡程度を支配する大名であったこと、信忠とともに二条御所で討死していることなどを考えあわせると、やはり、信長・信忠父子に近侍した馬廻衆であったとみなすべきであろう。

月岡野の戦い（『公記』その他）や関・加治田合戦（『南北山城軍記』）以外に、新五の戦ぶりを具体的に伝える史料はない。ここでは、池上裕子氏による論考⁽²⁸⁾を参照に、新五が転戦した戦場の様相を探り、新五の行動を想像してみたい。

池上氏によれば、信長にとって最も重要な課題は、戦争遂行による分国拡大であり、そのために「絶対服従する、強い主従の絆で結ばれた者」しか信用しなかったという。すなわちそれは、息子や弟たちのような一門衆か、上洛以前の分国である尾張・美濃出身の譜代ということになる。譜代の大半は尾張出身であり、新五は数少ない美濃出身者であった

が、同時に信長の岳父にあたる斎藤道三の近親者でもあった。斎藤一門の代表格として新五を取り立てることは、信長の美濃支配にとって有用な策だったのかもしれない。

池上氏は、「根切り・なで切り」「殲滅戦」や「反抗に怒りと憎しみをつのらせ、残虐に走って鬱憤を散ずる」ことが、信長の戦い方の特徴であると指摘する。伊勢長島一向一揆の鎮圧はその典型であり、戦いの終盤には男女2万人が焼殺されたという（『公記』）。

前掲の通り、伊勢長島には新五も参陣している。新五の戦いぶりは記録されていないが、信長に「絶対服従」し、信長と「強い主従の絆」で結ばれていた新五にとって、主命に従い「根切り・なで切り」「殲滅戦」を遂行するよりほか、生き抜く道はなかったはずである。

我々は、軍記の記載や伝承から、「心優しき」新五像を描いてみた。だが、実際はどうであったか。月岡野の戦いで捕らえた捕虜のエピソードから推測し得るような寛容な一面があったのかもしれないが、織田家臣団の一員として信長による「根切り・なで切り」に大いに寄与し、多くの惨事に関わったことは否定できない。

歴史漫画のシナリオで描き切れなかったもうひとつの新五像については、今後の課題とし探究を続けたい。

むすびにかえて ～歴史探究と歴史を生かしたまちづくり～

今回の調査及び実践の目的は、地元の教育委員会と協力しながら史跡踏査や文献研究を進め、さらに史実をベースに歴史漫画を制作することにより、文化財の普及・活用を図ることにある。加治田城や堂洞城に幾度も登り、塹堀や堀切、切岸、虎口といった城郭構造の知識を身につけたこと。龍福寺に残る古文書の中に、斎藤新五や織田秀信の名前や花押を見出し、内容を少しずつ理解していったこと。その時の喜びは格別であった。

加治田やその周辺に残る建造物や工芸品、出土遺物など、文書の人物たちが見たかもしれない光景を共有できることは幸せであるし、後世にも伝えたいと思う。私たちが最も強調したいことは、実証された歴史とふれあう素晴らしさであるが、伝承や軍記を調べその背景を探ることも探究の醍醐味であることを今回知った。

伝承や軍記も立派な地域の財産である。地道な探究を基礎に虚実の線引きをはっきりさせれば、想像力たくましく歴史を復元し、まちづくりに生かすことは積極的に行うべきだと考える。

歴史漫画『斎藤新五利治』は今年度3月刊行予定である。想像力豊かに新五の生涯を描いた漫画。研究者による巻末の学術研究の成果。その双方を楽しみながら理解していただくために、2023年3月26日、富加町・関高等学校共催のシンポジウムを開催予定である。

最後になったが、今回お世話になったすべての皆様に感謝申し上げたい。

【引用・参考文献・注釈】

- (1) 『富加町史』上巻史料編（富加町 1975）、同下巻通史編（富加町 1980）に詳しい。
- (2) 『関高 SGH 情報 第 14 号』（関高校 2019）
- (3) 田中莉子・藤村彩須果「織田信長の東美濃攻略戦」とまちづくり『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第 4 号』（2021）で両名が主張している。本稿は、全国高校生歴史文化フォーラム（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館主催 2020）において入賞を果たした。
- (4) 島田崇正「織田信長の東美濃攻略と地域の歴史資源の活用を考える ～岐阜県富加町～」『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第 3 号』（2020）
- (5) 『夕雲の城』（2017）、『猿啄の春』（2018）は、みのかも定住自立圏による歴史 PR 漫画として相次いで制作・出版された。巻末には、島田崇正氏（考古学）、山内正明氏（文献史学）による論考が付されている。
- (6) 「おうち de 歴史イベント 夕雲の城～織田信長の東美濃攻略を考える～」(美濃加茂市・坂祝町・富加町共催、2021.3.28)において地域研究部員が発表。『Seki Bridge Journal 第 3 号』（関高校 2021）、『Seki Bridge Journal 第 10 号』（関高校 2021）、『織田信長の東美濃攻略を考える』（富加町 2021）を参照。
- (7) 『Seki Bridge Journal 第 5 号』（関高校 2021）、『Seki Bridge Journal 第 11 号』（関高校 2021）
- (8) 『Seki Bridge Journal 第 9 号』（関高校 2021）、[\[#\]2021 年高校生ポスターセッション 報告 | 一般社団法人 日本考古学協会 \(archaeology.jp\)](#)
- (9) 『Seki Bridge Journal 第 24 号』（関高校 2021）
- (10) 島田前掲 2020 を参照。
- (11) 「始動！歴史 PR マンガ作成事業（第 3 弾）」『広報とみか 7 月号』（2022）
- (12) [木曾川下りアイデアソン募集要項 \(gifu-net.ed.jp\)](#)

木曾川遊覧を楽しむ川下りは、早くも 1914（大正 3）年に始まった。経済成長期に全盛を迎え、1 年で観光客 74 万が乗船する年もあったというが、その後衰退し、2012 年以降は完全休止となった。木曾川沿いには、東美濃攻略戦の史跡、犬山城、伊木山城、鶴沼城、栗栖の渡し、猿啄城が所在することから、本校地研部員が川下りによる史跡探訪を構想し、上掲(9)で紹介したイベントにおいてツアー提案の中で取り上げた。2022 年度、高校生による木曾川下り復活計画は、「木曾川中流域観光振興計画事業」（可児市・美濃加茂市・坂祝町・犬山市・岐阜県）の中に事業の一環として位置付けられ、10 月 30 日に社会実験として実施される予定である。
- (13) 東美濃攻略戦に関しては『信長公記』に記載がある。作者太田牛一が信長の弓衆として参陣していることから比較的詳しい記載となっている。新五が佐藤家を相続した経緯は『堂洞軍記』『南北山城軍記』（ともに江戸期）に記載がある。初代加治田城主佐藤忠能や 2 代城主新五が、加茂郡・武儀郡及び隣接地域を支配したことは、「斎藤義龍知行充行状」（1556 斎藤文書）、「織田信長知行充行状」（1565 備前国臣古証文）から見て明らかである（『富加町史』上巻史料編 1975 より引用）。
- (14) 横山住雄『斎藤道三と義龍・竜興 戦国美濃の下克上』（戎光祥出版 2015）
- (15) 『公記』で確認できる合戦は、伊勢大河内城攻め（1569）、近江小谷城攻め（1570）、摂津野田・福島攻め（1570）、河内交野城救援（1572）、山城榎島城攻め（1573）、伊

勢長島一向一揆攻め（1574）、加賀攻め（1577）、越中攻め（1578）の8例である。このほか、関・加治田合戦（1565）に関しては『公記』に記載はないが、合戦の詳細な記述が『堂洞軍記』『南北山城軍記』に登場する。また『南北山城軍記』には、越中攻めのあとに有岡城の戦い（1578-79）に参陣したことが記されている。

- (16) 「斎藤新五宛織田信長朱印状（折紙）」（1578 斎藤文書）、「斎藤新五宛織田信長黒印状写」（備前国臣古証文 1578）、「斎藤新五宛織田信忠書状写」（1578 黄薇古簡集）、「斎藤新五宛織田信長黒印状写」（備前国臣古証文 1578）に見られるとおりである（『富加町史』上巻史料編 1975 より引用）。『』
- (17) 『公記』に記載がある。
- (18) 『Seki Bridge Journal 第 10 号』（関高校 2022）
- (19) 『公記』月岡野の戦いの記載。
- (20) 『Seki Bridge Journal 第 10 号』（関高校 2022）
- (21) 萩原大輔『越中・能登・加賀の戦国 謙信襲来』（能登印刷出版部 2020）
- (22) 高岡徹「戦国期上杉支城の復元研究 越中今泉城をめぐる戦国史」『富山市日本海文化研究所紀要 第 6 号』（富山市 1993）
- (23) 『富山市内遺跡発掘調査概要 X V』（富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2015）
- (24) 萩原氏の「自焼没落」説は、戦場となった一帯の自然地形からも見ても興味深い。一帯は神通川と常願寺川とに挟まれた扇状地系であり、当時は沼や湿地が各所にあったと考えられる。逃げ場を失った河田・椎名勢はひたすら南に走り、月岡野の地で敗れ一網打尽にされたのであろうか。ただし、斎藤勢による今泉城下への放火及び月岡野への退却を、河田・椎名勢をおびき寄せる陽動作戦と考えることも可能である。結局、史料解釈のみではどちらとも決しがたいのが現状と言える。
- (25) 堀田裕史「津毛城・桃井直常・黒牧彦など 富山国際大学周辺と歴史と伝説から」『富山国際大学地域学部紀要 第 8 巻』（富山国際大学 2008）
- (26) 合戦の百数十年後の元禄期以降、堂洞合戦を題材とした軍記が次々と作られた。『堂洞軍記』『永禄美濃軍記』『濃州堂洞記』『堂洞落城記』『異本堂洞軍記』『南北山城記』、以上 6 種が知られている（『富加町史』上巻史料編 1975）。中身を吟味すると、『信長公記』の記載を骨格に、おそらく民間で伝えられ流布された口伝の類が織り込まれてできあがったことが想像される。骨肉相食む争いや岸一族の苛烈な最期は、地域の人々に相当なインパクトを与えたと考えられるし、儒教が浸透した江戸中期以降においては、忠義に殉じた岸一族や斎藤新五の生き方が「手本」とされた可能性もある。一方、越中の新五伝説は、井上忠雄「越中に於ける伝説と口碑」『越中史片影』江花叢書第 15 巻（江花会 1937）、『太田郷土史』（太田郷土史編纂委員会編 1987）に記載があるがいずれも口伝であり、元来の由来や成立にいたる史的背景については不明である。
- (27) 谷口克広『信長の親衛隊 戦国覇者の多彩な人材』（中央公論新社 1998）
- (28) 池上裕子『織田信長』（吉川弘文館 2012）

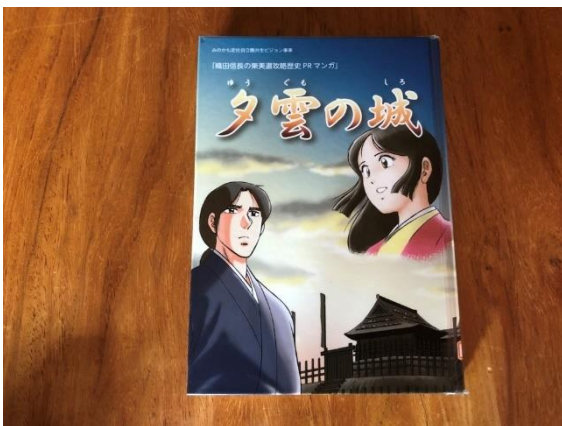
【写真図版 その1】



津保川沿いの信長本陣跡を遠望（2019.7）



加治田城本丸跡の踏査（2020.11）



歴史漫画第一弾『夕雲の城』（2017）
堂洞合戦をテーマとする漫画



漫画第二弾『猿啄の春』（2018）
堂洞合戦前哨戦をテーマとする漫画



みのかも定住自立圏歴史イベント
夕雲の城ツアーを提案（2021.3）



ズームを活用したバーチャルツアー
複数の山城を同時中継で解説（2021.5）

【写真図版 その2】



木曾川下りで古戦場遠望（2021.7）



ドローンによる史跡撮影（2021.10）



**歴史漫画シナリオ検討会議（2022.8）
渡辺浩行氏、島田崇正氏も参加**



**木曾川下り復活計画の会議（2022.8）
高校生有志、自治体・企業の代表が参加**



今泉城跡（富山県富山市）の踏査



**太田本郷城跡（富山県富山市）の踏査
（左右写真ともに 2022.7）**

【写真図版 その3】



渡辺浩行氏による漫画作画（2022.7）



コミュニティFMに出演（2022.8）



『広報とみか 7月号』（2022）表紙

作画： 渡辺浩行氏

画題： 二条新御所の斎藤新五

署名・花押は龍福寺文書より転載

斎藤新五利治の実像への思索

富加町教育委員会 文化財専門官 島田崇正

今回、歴史マンガを発刊するにあたり何にスポットを当てるかを考えたとき、真っ先に思い浮かんだのが「斎藤新五利治」だった。理由は2つある。ひとつは、彼の人生を描くことで、近年刊行された「夕雲の城」(美濃加茂市・富加町・坂祝町2017刊行)の続編となり、シリーズ化されることで事業効果が見込める点である。発刊から5年を経ている点もちょうど良い間隔であった。もうひとつは、斎藤新五利治という人物の評価が未だ定まっていないという点である。中濃の要衝「加治田城」の城主として、さらには信長馬廻であった彼の経歴は華々しい。しかし武将としての評価が語られることはほとんど無かった。彼が残した一次史料が少なく、検討に制約がある点を差し引いても、いまだ少し評価を試みるべきだと感じるのである。

一連の事業を地域史の掘り起こしという観点でも有意義な機会とすべく、斎藤新五の実像について僅かではあるが従来よりも踏み込んで迫ってみた。詳しくは令和3年度に刊行した「歴史資料集 織田信長の東美濃攻略を考える」と、今回の歴史マンガ「斎藤新五利治」巻末の資料編をご覧ください。ここでは少しだけ新五についての所感を述べ、今後の思索へと繋げていきたい。

新五は織田信長の馬廻衆であった可能性が高い。マンガの中ではそのように描いた。馬廻は旗本に分類され本陣を守護する役割が課せられた。そう考えると、信長本陣が動くような歴史に名高い合戦の数々には、新五も参戦したと考えるべきだろう。

さらに注目すべきは、「信長公記」において諸合戦の陣容は各部隊を率いた部隊長を列記しながら記述しているのであるが、こうした文脈の中で新五の名が計8回も登場するのである。このことは、時として新五が本陣を離れ、部隊を率いる部将として織田軍の陣容の一角を担ったことを示している。例えば天正5年(1577)8月の加賀国攻めでは部隊を率いた12人の部将が列記されているが、滝川一益、羽柴秀吉、惟住(丹羽)長秀という錚々たる面子に次いで、新五が4番目に記載されている。「信長公記」でのその他の場面での列記順をみると、美濃衆において稲葉一鉄に次ぐ実力者として位置付けられているように思える。かつての美濃国主斎藤道三の末子という出自の確かさも、彼の大きな力となっていただろう。こうした観点から、新五が単なる信長の傍仕えでなく部将に抜擢される器であったことを読み取りたい。織田信長の天下静謐を目指した合戦史の屋台骨を支えた武将の一人であることは間違いない。

彼の実力と活躍もあって天正6年(1578)には総大将として越中攻め援軍を任されることになる。そして月岡野合戦で越中の上杉軍を撃破する快進撃を成し遂げる。彼の人生のハイライトである。ところで新五が城主を務めた加治田城下はいわゆる飛騨街道の宿駅として栄えた。美濃と飛騨、さらに先の越中・越後の街道と繋がる広域幹線街道であったことが史料から明らかとなっている(永禄六年北国下り遣足帳)。私は、新五が越中攻略の大役を担った背景に、彼が加治田を拠点として日常的に越中・越後の情報を入手できた立地性も関係しているとみている。今回のマンガ制作に伴う資料調査で、天正2年(1574)の段階で、上杉家との交渉の窓口である織田方の取り次ぎ役を新五が担っていたことを明らかにした。月岡野合戦の4年も前の話である。こうした事柄から考え

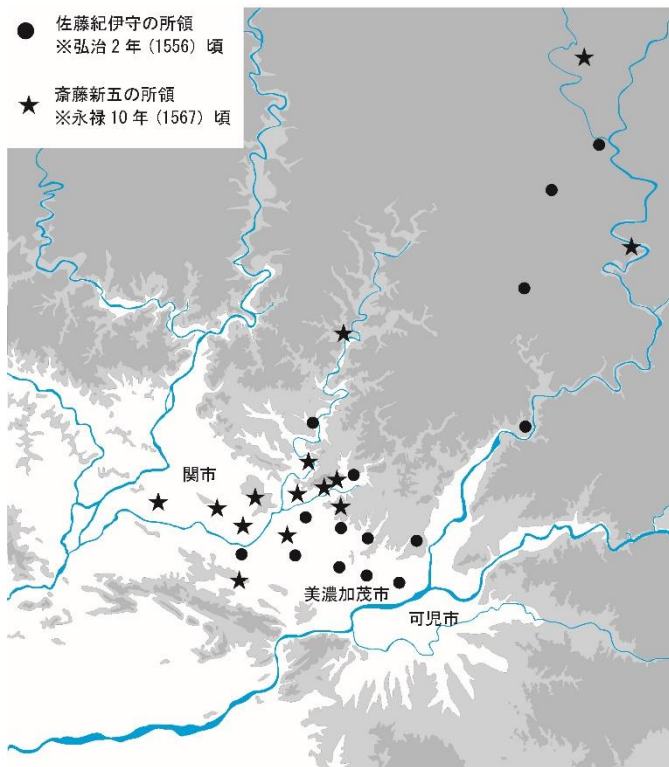


図1 所領分布図

信長の命で佐藤紀伊守から加治田城を継いだ。この時に信長が新五宛てに発給した知行充行状には、論功行賞として与えた所領13ヶ所が記されている(備藩国臣古証文)。また、この頃に佐藤紀伊守が有していた所領15ヶ所も明らかとなっており(弘治二年(1556)斎藤義龍知行充行状写)、ひとつの地図にプロットしたのが図1である。新修関市史でも指摘されているとおり、斎藤新五へ与えられた所領と佐藤紀伊守の所領は全く重複しない。つまり佐藤紀伊守は城主を斎藤新五に譲渡した後も旧領は保証されたのである。織田方への内応に対する恩賞とも考えられるが、一方で先にも述べたとおり、馬廻と部将を兼ねながら各地を転戦するその後の新五の姿から考えると、当面の間は在地の切り盛りを佐藤紀伊守にそのまま担わせたとみるべきだろう。そう考えると、この段階においてすでに信長から才覚を見込まれ織田軍団の構想の中に組み込まれていたことになるのではないか。この点もしっかりと検討し評価すべきであろう。

さらに、加治田の領地経営面を考えてみると、佐藤紀伊守は中濃に根指した土豪層である佐藤氏の惣領級であり、室町的ないわゆる「国人」といわれる存在である。一方で斎藤新五は、戦乱が大規模化する織豊期に現れる地域に根ざさない職能的な武将であり、ある意味で武将として対極的な存在である。この両者が相互補完的に領地経営に当たっている姿が浮かび上がり、それはまさしく「近世移行期」の新たな地域支配の重要な一事例なのではないだろうか。この点も今後の検討と評価を促したい。

さて、各地を転戦し在地を離れるイメージの斎藤新五であるが、縁あって京都の公家出身の平井宮内を加治田に招き保護している。平井宮内が天正4年(1576)におこなった連歌集が今も残っており、京文化を地方に広めた姿が想像される。また平井家には新五が発給した諸役免許状が残っている。おそらく商売を奨励したとされ、これを基礎に平井家は近世商家として、さらには旗本代官として宿場町加治田の中心的存在となっていく。新五の施策は近世宿場町の発展へと繋がっていくのである。

ると、信長から常に北陸方面をにらむ役目を委任されていた可能性もでてくる。そうであれば非常に重要な役割であったはずだ。重ねてとなるが、こうした大役を新五が担った背景は、やはり彼が拠点とした「加治田城」の重要性があるのだと認識を促したい。中濃の拠点としてだけでなく、広域街道を呑み込む情報集積拠点としての加治田の重要性に注目し、我々の地域を考えるひとつの視点を提示しておきたい。

最後に、加治田と斎藤新五との関わりについて考えを巡らせてみよう。堂洞合戦後の絹丸での戦いで、織田軍の援軍として美濃の斎藤・長井の軍勢を撃退したのを皮切りに、関城まで進軍を果たした。信長の東美濃攻略を締めくくった新五は、

信長の命で佐藤紀伊守から加治田城を継い

文献史料等にみる加治田城主斎藤新五利治

富加町役場総務課 山内 正明

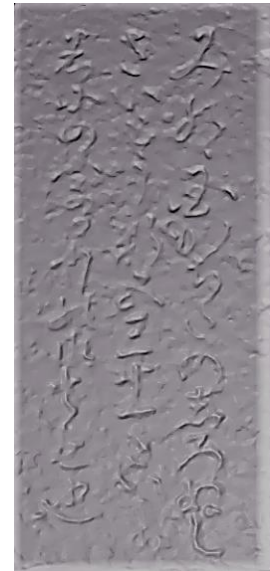
1. はじめに

本稿では、斎藤新五利治（1552?～1582。以下、斎藤新五と表記）が加治田城主であったことが窺える文献史料等の一部を紹介した後、「加治田城主としての斎藤新五の姿」について若干の考察を行う。

2. 墓碑銘及び文献史料にみる加治田城主斎藤新五

【史料1】 斎藤新五墓碑銘文（京都阿弥陀地墓地に残る五輪塔）

			地	
き	さい	みの	天	天
ふ	いと	の	長	正
の	とう	ゝ	道	十
ふ	新	国	運	年
な	五	か	大	六
か	三	ち	居	月
ふ	十	た	士	二
し	一	の		日
の	さい	しろ		
御		ぬし		
とも				
也				



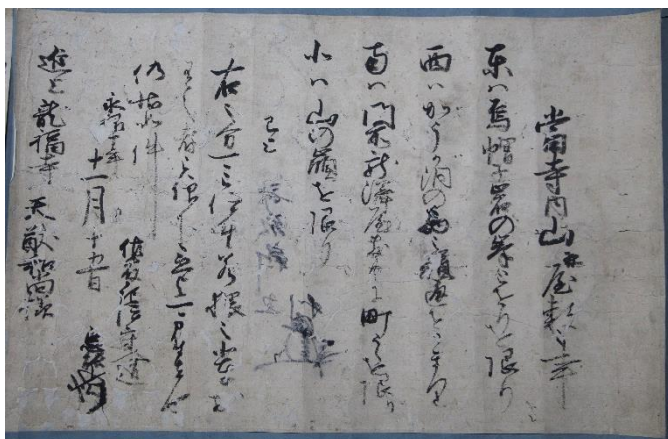
【画像1】 特殊な処理を施した斎藤新五墓碑銘文

【提供】 富加町教育委員会

【史料1】は、京都市寺町にある阿弥陀寺墓地に残る斎藤新五供養塔（花崗岩で作られた2mを超える大型の五輪塔）の地輪に刻まれた銘文である(1)。なお、【画像1】は令和4（2022）年9月30日に富加町教育委員会職員が現地で撮影した写真をもとにメタシェイプによる3D計測を実施し、上の写真のようなソリッド画像を作成したものである。

【史料1】には、天正10（1582）年6月2日、天長道運大居士（斎藤新五のこと）(2)、美濃国の「かちたのしろぬし」（加治田城主）である斎藤新五は31歳で亡くなった。同人は「きふのふなかふし」（岐阜の織田信長・信忠父子）の御供であったと刻まれている。ここから、斎藤新五が「みのゝ国かちたのしろぬし」、つまり美濃国加治田城主であったこと、織田信長及び息子信忠の「御とも」（馬廻など主君の側近くに仕える者）であったことが読み取れる。なお、【史料1】の内容が正しい場合、新五が亡くなった時の年齢は31歳であったことも読み取れる。

【史料 3】永禄 10（1567）年 11 月 15 日付け「佐藤忠能寺内山・屋敷安堵状」
 （「龍福寺文書」、『富加町史上巻 史料編』61 頁所収）



【画像 2】佐藤紀伊守が龍福寺領を定めた文書



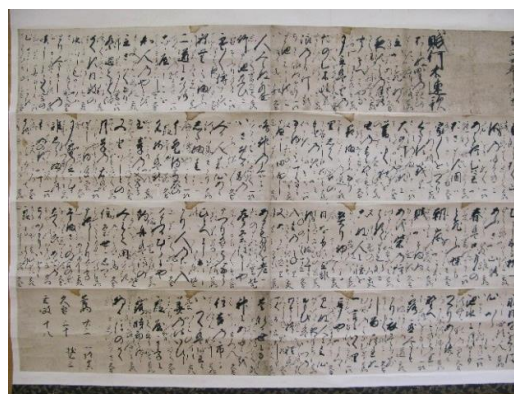
【画像 3】斎藤新五の裏判

【史料 3】は、佐藤紀伊守入道忠能（以下、佐藤紀伊守と表記）が龍福寺（現：岐阜県加茂郡富加町加治田）領の範囲を示した文書である。そして、【史料 3】で最も注目すべき点は、「斎藤新五利治（花押）」と記された裏判である。

加治田城は佐藤紀伊守・右近右衛門父子の本拠地であったが、右近右衛門は永禄 8（1565）年 9 月 28 日の堂洞合戦翌日に戦死、紀伊守もその後に伊深（現：岐阜県美濃加茂市伊深地区）へ隠居したとされる（ただし完全に隠居した訳ではなく、加治田への影響力を保持）(6)。従って、【史料 3】に「斎藤新五利治（花押）」の裏判があることは、隠居後も加治田への影響力を持ち続けていた佐藤紀伊守よりも斎藤新五が上位の立場、つまり加治田城主であること、そして上記文書を斎藤新五が承認・保証したことを示している。

【史料 4】永禄 11（1568）年 2 月 21 日付け「斎藤利治掟書写」
 （「平井文書」、『岐阜県史 史料編 古代中世補遺』214 頁所収）

棟別門並家役并諸商買役之事
 一 札馬并諸国往還之商売之事
 一 城下自然諸商売停止之儀、雖有之、不可有異儀之事
 一 右之旨令免除者也
 永禄拾老年
 二月廿一日
 宮内卿殿へ
 利治（花押影）



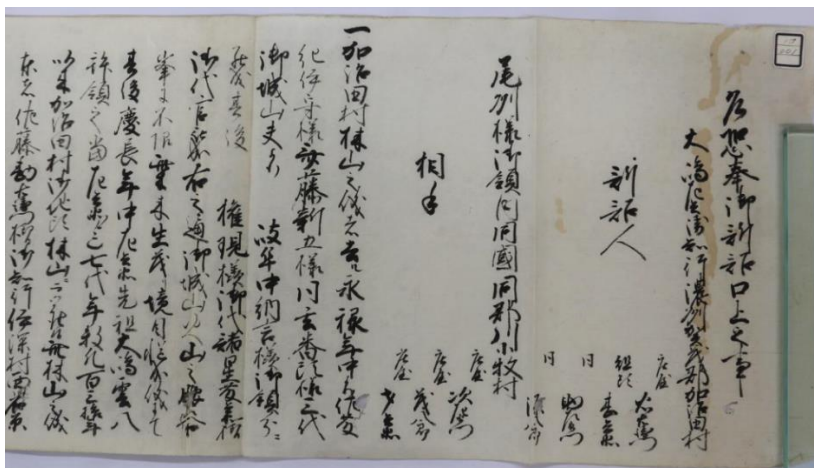
【画像 4】平井宮内卿（信正）の实在を示す史料
 （部分拡大）

（平井玖説他天正四年五吟連歌百韻。富加町指定文化財。富加町郷土資料館所蔵）

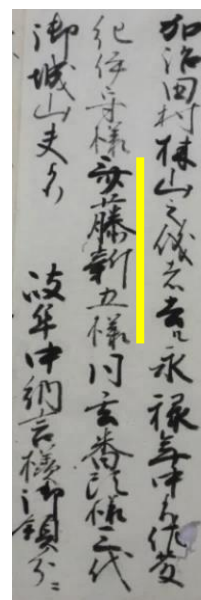
【提供】富加町教育委員会

【史料4】は、永禄11（1568）年2月21日付けで「宮内卿」（加治田平井家初代信正のこと。1492～1585）へ加治田城下での特権を付与した文書である。【史料4】は全3箇条からなり、第1条では「棟別門並家役」（家屋の棟数毎に臨時に課される税金のこと）及び加治田城下での「諸商買役」（商売に課される税金のこと）の免除、第2条では「札馬」及び平井家が諸国を渡り歩いての商売許可、第3条では万が一、城下で諸商売を禁止することがあったとしても、不服を申し立てないことを免除する。つまり、異義を申し立てて良いという意味になるので、平井家への商売奨励につながる条文である。これら3箇条は平井家へ各種特権を認める内容であり、その差出人が「利治」（現在、【史料4】の原本は所在不明であり花押は実見出来ていないが、斎藤新五は永禄8（1565）年11月頃に加治田城主となったこと（【史料2】）、同10（1567）年11月15日付けの【史料3】で「斎藤新五利治（花押）」の裏判があることから、斎藤新五である可能性が高い）と記されていることから、斎藤新五が城主として行った施策の一つであると考えられる。

【史料5】元禄7（1694）年8月、「加治田川小牧山論訴訟状」（「平井文書」、『富加町史上巻 史料編』334頁～336頁所収。現在は富加町郷土資料館所蔵）



【画像5】「加治田川小牧山論訴訟状」冒頭部分



【画像6】【画像5】の拡大（斎藤新五記載部分）

【史料5】は、元禄7（1694）年8月、加治田村（旗本大嶋氏領）と川小牧村（尾張藩領）との間で生じた、加治田村の裏山の境界を巡る訴訟史料である。なお、冒頭部及び末尾の文言から、加治田村が川小牧村を相手取り江戸の奉行所へ訴えたことが分かる。また、訴訟の結果である裁許状（同8（1695）年10月14日付け「加治田川小牧山論裁許状」）も残されており(7)、勘定奉行井戸志摩守良弘ほか7名の連名により加治田村の訴えが認められ、実地検分の結果に基づく裏山の境界が絵図上に墨で記されている。

【史料5】は全5箇条からなり、第1条に「一、加治田村林山之儀は、去ル永禄年中より佐藤紀伊守様・斎藤新五様・同玄蕃頭様三代御城山、（後略）」と記されている。また、同条によると、それ以降は「岐阜中納言様」（織田秀信）、関ヶ原の戦い後は「諸星藤兵衛様」、さらには旗本大嶋氏の領地となったこと、「加治田村林山」と接する東西南北の領主と村名が記されている。そして、【史料5】で注目すべき点は【画像6】の傍線部である。

斎藤新五が加治田城主であった期間は約 15 年間（1565.11 頃～1582.6.2）で、期間中は信長馬廻、その後は息子信忠の配下として各地を転戦していたことが『信長公記』などの記述から分かる(8)。従って、新五が加治田に滞在する期間は短かったと思われる。そうした中、【史料 5】で佐藤紀伊守・斎藤玄蕃助利堯と併せて傍線部にその名が記されていることは、天正 10（1582）年 6 月 2 日のいわゆる「本能寺の変」で討死してから 100 年以上経った後も、斎藤新五は加治田村では城主として認識されていたことを物語っている。

3. 加治田城主としての斎藤新五を考える

前節では、斎藤新五が加治田城主であったことが窺える史料の一部を紹介した。最後に、本稿で紹介した文献史料等から読み取れる、「加治田城主としての斎藤新五の姿」について若干触れておく。

まず指摘したいのが、城主としての姿が窺える一次史料が非常に少ない点である。これは、斎藤新五が 31 歳という短い生涯であったこと（【史料 1】）、加治田城主時代は信長馬廻、その後は信忠配下として畿内・北陸など各地を転戦していたことがおもな要因であろう。また、斎藤新五に関する史料調査も十分に行われていない。こうした中、加治田龍福寺領の範囲を定めた文書（差出人は佐藤紀伊守）に「斎藤新五利治（花押）」の裏判があること（【史料 3】）、加治田平井家へ各種特権を認める文書を発給したこと（【史料 4】）は、城主としての姿が一次史料から窺える数少ない事例である。

また、斎藤新五は地元の加治田村では城主として後世まで認識され続けていた点も重要である。この点は【史料 5】の傍線部が端的に示している。前述したように、斎藤新五は信長馬廻等として各地を転戦する武将であったことから、本拠地である加治田に滞在する期間は短かったと思われる。こうした中、【史料 5】の傍線部にその名が記されていることから、少なくとも江戸時代中頃までは加治田村では斎藤新五も城主の一人として認識されていた。また、【史料 5】は元禄 7（1694）年のものであることから、新五の死後から 100 年以上経っても、同村の中では文書あるいは口伝により「斎藤新五＝加治田城主」が脈々と受け継がれていた。

史料的制約もあり、加治田城主としての斎藤新五の姿はまだ未解明の部分が多い。今後、史料調査等による情報収集と分析作業を継続的に行うことで、謎に満ちた「斎藤新五利治」のさらなる人物像解明に繋がるだろう。

<謝辞>

関高等学校地域研究部顧問の林直樹先生にはこのような執筆機会を与えていただき、厚くお礼申し上げます。また、同高地域研究部・文芸部の皆様には、富加町広報誌での特集記事掲載、さらにはコミュニティ FM での歴史マンガ『斎藤新五利治』PR 活動に際し、多大なご協力を賜りました。ありがとうございました。

<註>

(1) 阿弥陀寺の斎藤新五墓碑銘文については、横山住雄氏によって判読が試みられている（横山 2015）。ただし、最後の行は判読困難によりいくつか欠字とされている。また同氏は、五輪塔の建立時期を江戸時代初期の寛永～寛文頃と推定されている。

- (2) 富加町加治田にある龍福寺の位牌には、「嚴珠院殿天長道運大禪定門、天正一〇年六月二日、於二条城死」とあることから、地輪に刻まれた「天長道運」とは斎藤新五のことを指す。また、「居士」とは男子の死後、その法名の下に付ける称号のことを指すが、銘文に「大居士」とあることから、斎藤新五は位の高い人物であったことも読み取れる。
- (3) (永禄8年)9月9日付け「越後直江景綱宛織田信長書状写」(奥野高廣著『織田信長文書の研究 上巻』48号)
- (4) 天理大学附属天理図書館所蔵『信長記一 共十』
- (5) 永禄8(1565)年11月3日付け「尾張坪内利定等宛織田信長判物写」(「坪内文書」、『織田信長文書の研究 上巻』57号)ほか。
- (6) 永禄10(1567)年8月12日付けで佐藤紀伊守が龍福寺の天猷玄晃に宛てた文書の中で、寺領として羽生(現:岐阜県加茂郡富加町羽生地内)五千疋を寄進したこと、**【史料3】**の差出人が佐藤紀伊守であることなどから、紀伊守は隠居後も「実際には依然として在地で力を有し続ける実力者の姿が想像できます。」という島田崇正氏の指摘がある。(『夕雲の城』資料編、16頁~17頁)
- (7) 「平井文書」(『富加町史上巻 史料編』337頁所収)。現在は富加町郷土資料館所蔵。
- (8) 斎藤新五の転戦履歴は、拙稿2021「斎藤新五の生涯一覧表」(54頁)及び富加町2023『斎藤新五利治』資料編(109頁~123頁。島田崇正氏執筆)を参照のこと。

<参考文献>

- ・富加町1975『富加町史上巻 史料編』
- ・同2023 郷土の偉人マンガ『斎藤新五利治』(資料編)
- ・美濃加茂市・坂祝町・富加町2017『夕雲の城』(資料編・考察編)
- ・山内正明2021「加治田城主斎藤新五とその生涯」(歴史資料集『織田信長の東美濃攻略を考える』美濃加茂市・坂祝町・富加町、43頁~54頁)
- ・横山住雄2015『斎藤道三と義龍・龍興 戦国美濃の下克上』(中世武士選書29、戎光祥出版、227頁~228頁)

姉小路氏城館跡と越中西街道について

飛騨市教育委員会 係長・学芸員 三好清超

はじめに

2023年3月1日、富加町より『郷土の偉人マンガ斎藤新五利治』が刊行された（富加町2023）。これは県立関高等学校地域研究部が富加町教育委員会と連携し、織田信長に関する文化財等の調査研究で得た知見を普及する目的で作成したものである。その特徴は、漫画というあらゆる世代に親しみやすいツールの巻末に、学術的な知見を掲載していることにある。

同書では、天正6年（1578）年の斎藤新五利治（以下、斎藤新五とする）の越中出陣が姉小路氏の手引きとされている。本稿では、飛騨市域を通る街道のうち、越中西街道を進軍ルートと想定し、当該期の姉小路氏城館跡の様相を紹介したい。

1. 斎藤新五の進軍ルートの想定

『信長公記』においては、越中の神保長住が信長と対面した後に三木自綱に連絡し、佐々成政とともに飛騨国経由で越中に入国したことが記されている（下呂町史編纂委員会1986・飛騨市教育委員会2022）。飛騨市域には東・中・西の3本の越中街道が認められるが、いずれの街道を進んだかの記載はない。

一方、飛騨市域には、天正年間に南飛騨から進出して姉小路氏古川家の名跡を継いだ三木氏と北飛騨を治めた江馬氏がいた。姉小路氏城館跡は飛騨市古川町に、江馬氏城館跡は同市神岡町に分布する（図1）。姉小路氏城館跡は越中西街道沿いに分布し、江馬氏城館跡は越中中・東街道沿いに分布する。この状況からは、斎藤新五は越中西街道を進軍したと想定される。

2. 越中西街道と街道沿いの城館について

高山盆地から越中への街道は、高山盆地を過ぎて古川国府盆地との境で2つに分かれる。一つは今村峠・大阪峠を通り、高山市国府町域から神岡町域へ至る越中東街道である。もう一つは国府町域から古川町域へ至る越中西街道である。越中西街道は古川盆地の中央を通り、古川城跡・小島城跡・野口城跡の眼下を通り、飛騨市宮川町域の山間部へ入る。宮川町域では山間部の川沿いと尾根を通り、越中へ至る。

古川盆地には、斎藤新五が通過した時期に、古川城跡・小島城跡・野口城跡・向小島城跡・小鷹利城跡が機能していた。姉小路氏城館跡はこれらの総称である。

3. 天正6年ごろの姉小路氏城館跡

『姉小路氏城館跡－総括報告書－』によると、姉小路氏城館跡は大きく5時期に分かれることが判明している（飛騨市教育委員会2022）。このうち、斎藤新五に関わる時期は姉小路氏城館Ⅳ期にあたる。同書を参照し、概述する。

姉小路氏城館Ⅳ期は、16世紀中葉から後葉までである。姉小路氏3家のうち古川氏と小鷹利（向）氏の記録が見えなくなる。三木氏の勢力が古川盆地を掌握したと考えられる。

盆地中央の古川城跡では、現在確認できる縄張りは、当時期のものと考えられている（図 2）。また、発掘調査では、山上の主郭櫓台に礎石建物、虎口には石垣が築かれることが判明した。さらに、文献史料の成果では、虎口直下にあたる古川城跡の南麓に家臣団か寺社の存在を想定している。なお、宮川対岸には越中西街道とその周辺の集落が位置する。ここからは、山上に常住性の高い空間があり、山麓部に武家屋敷や寺社等の存在を想定することができ、対岸に集落という景観を想定することができる（図 3）。

一方、山城で最も顕著なのは、小島城跡・野口城跡・向小島城跡・小鷹利城跡において、盆地外へ向けた遺構配置が採用されることである。小島城跡では、神岡経由で越中へ通じる神原峠方面に堀切・堅堀を設ける（図 4）。野口城跡でも神岡経由で越中へ通じる数河峠方面に大規模な堀切と畝状空堀群を配した（図 5）。向小島城跡では飛騨白川郷方面に畝状空堀群を設けた（図 6）。また、小鷹利城跡でも飛騨白川郷方面に畝状堅堀群を配置する改修を行ったようである（図 7）。

まとめると、当時期の飛騨古川盆地では、三木氏の勢力が盆地中央寄りの古川城跡で居住性の高い山上の礎石建物と山麓の武家屋敷・寺社等を整備し、盆地北側の小島城跡・野口城跡・向小島城跡・小鷹利城跡において、群として軍事的な機能を果たしていたものと想定される。越中西街道はこれらに取り囲まれた古川盆地を通る。

おわりに

本稿では、『郷土の偉人マンガ斎藤新五利治』において、斎藤新五が越中出陣の際に姉小路氏の手引きで越中西街道を通過したと推測されていることから、当該期の姉小路氏城館跡の様相を紹介した。ここでは古川盆地に絞ったが、三木氏と縁のある山城として高山市の松倉城跡・広瀬城跡が著名である（岐阜県教育委員会 2005）。また、それ以前の居城として下呂市の桜洞城跡もある（下呂市教育委員会 2014）。

これらの飛騨地方の城館群の調査研究が進めば、斎藤新五の軌跡についてもさらに明確になる可能性があるだろう。

<引用参考文献>

岐阜県教育委員会 2005『岐阜県中世城館跡総合調査報告書（飛騨地区・補遺）』

下呂市教育委員会 2014『桜洞城跡発掘調査報告書』

下呂町史編纂委員会 1986『飛騨下呂 史料 2』

富加町 2023『郷土の偉人マンガ 斎藤新五利治』

飛騨市教育委員会 2022『姉小路氏城館跡－総括報告書－』飛騨市文化財調査報告書 第 16 集・姉小路氏城館跡調査報告書第 1 集

三好清超 2021『中世武家庭園と戦国の領域支配 江馬氏城館跡』新泉社

<図版出典>

図 1、三好 2021 を一部改変。

図 2、画：香川元太郎氏 監修：中井均氏。

図 3～7、飛騨市教育委員会 2022 を一部改変。

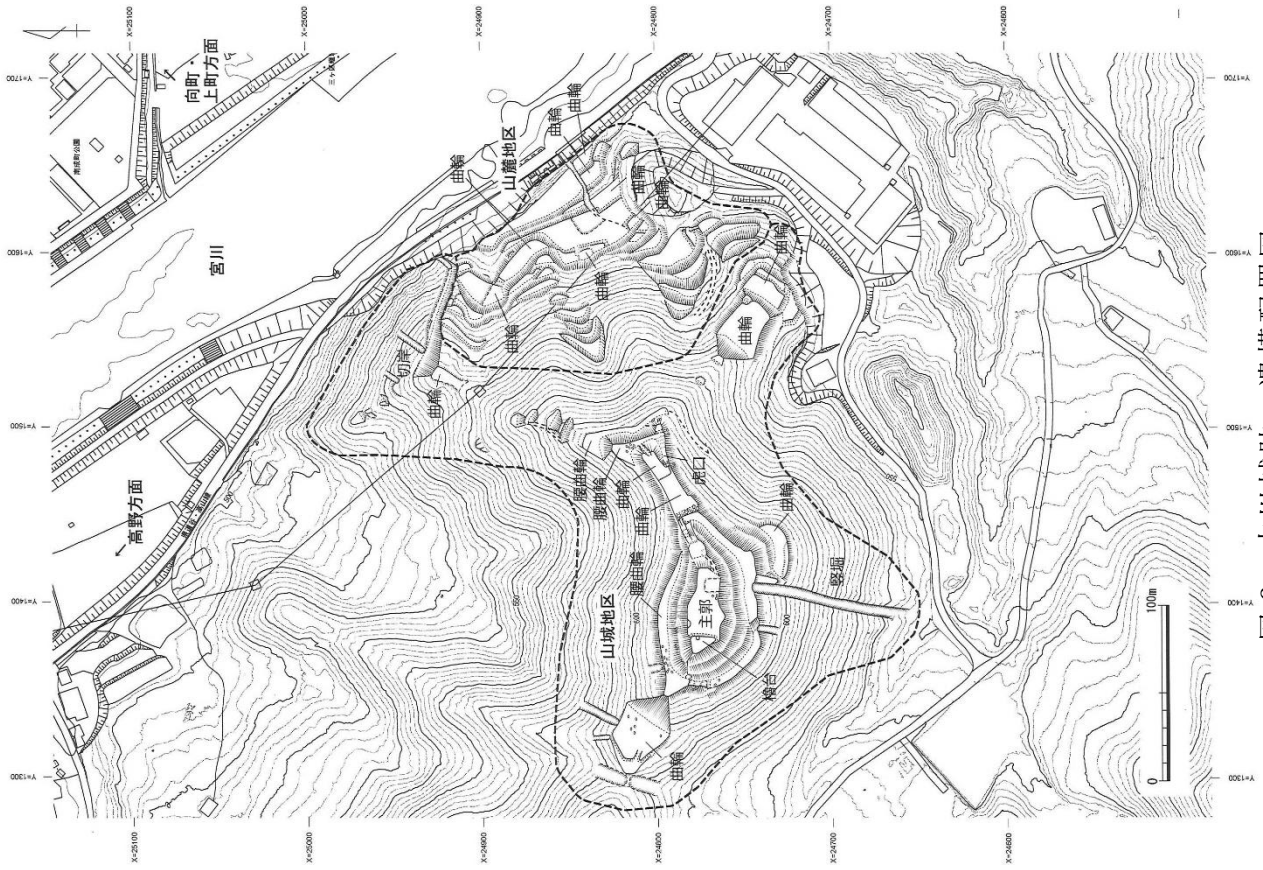


図2 古川城跡 遺構配置図



図3 古川城跡 復元イラスト図

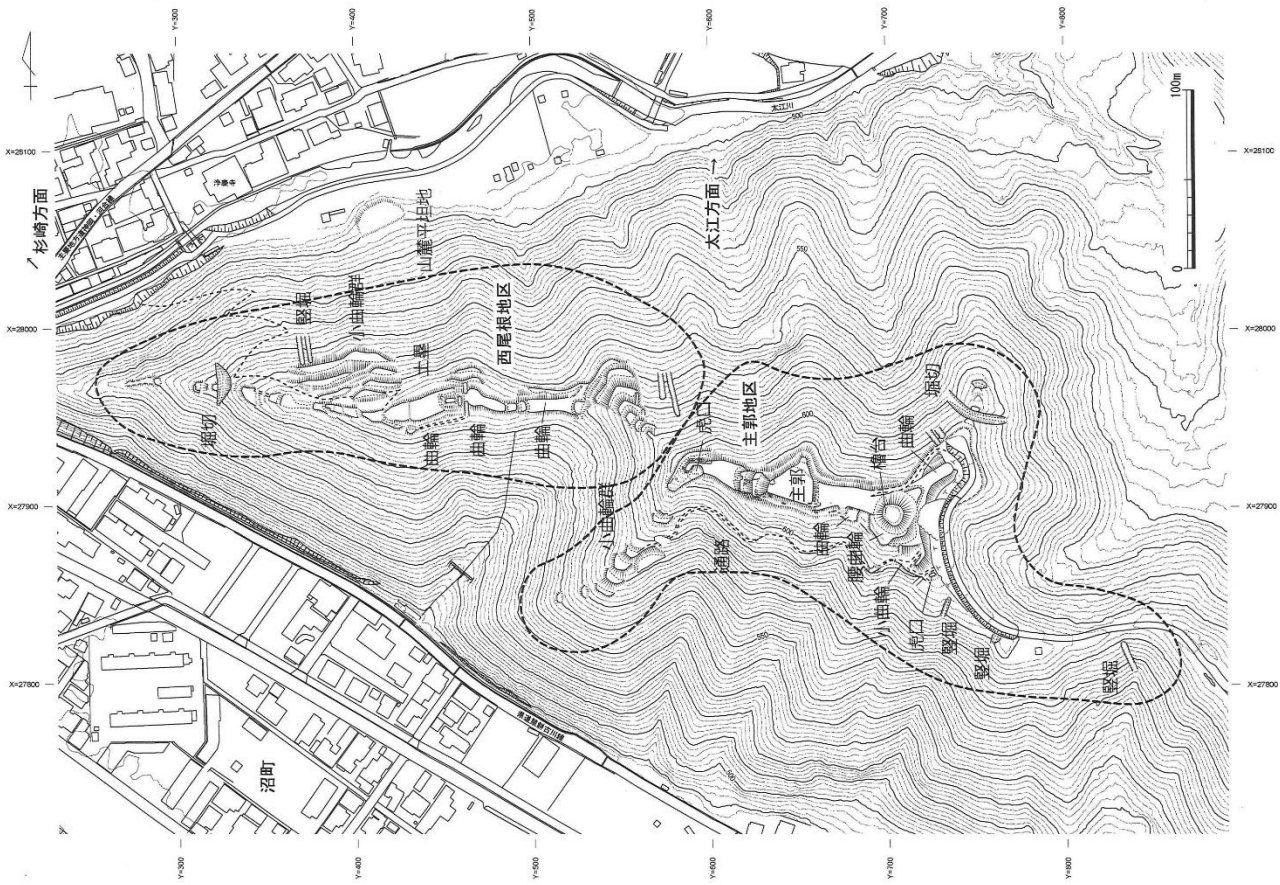


図4 小島城跡 遺構配置図

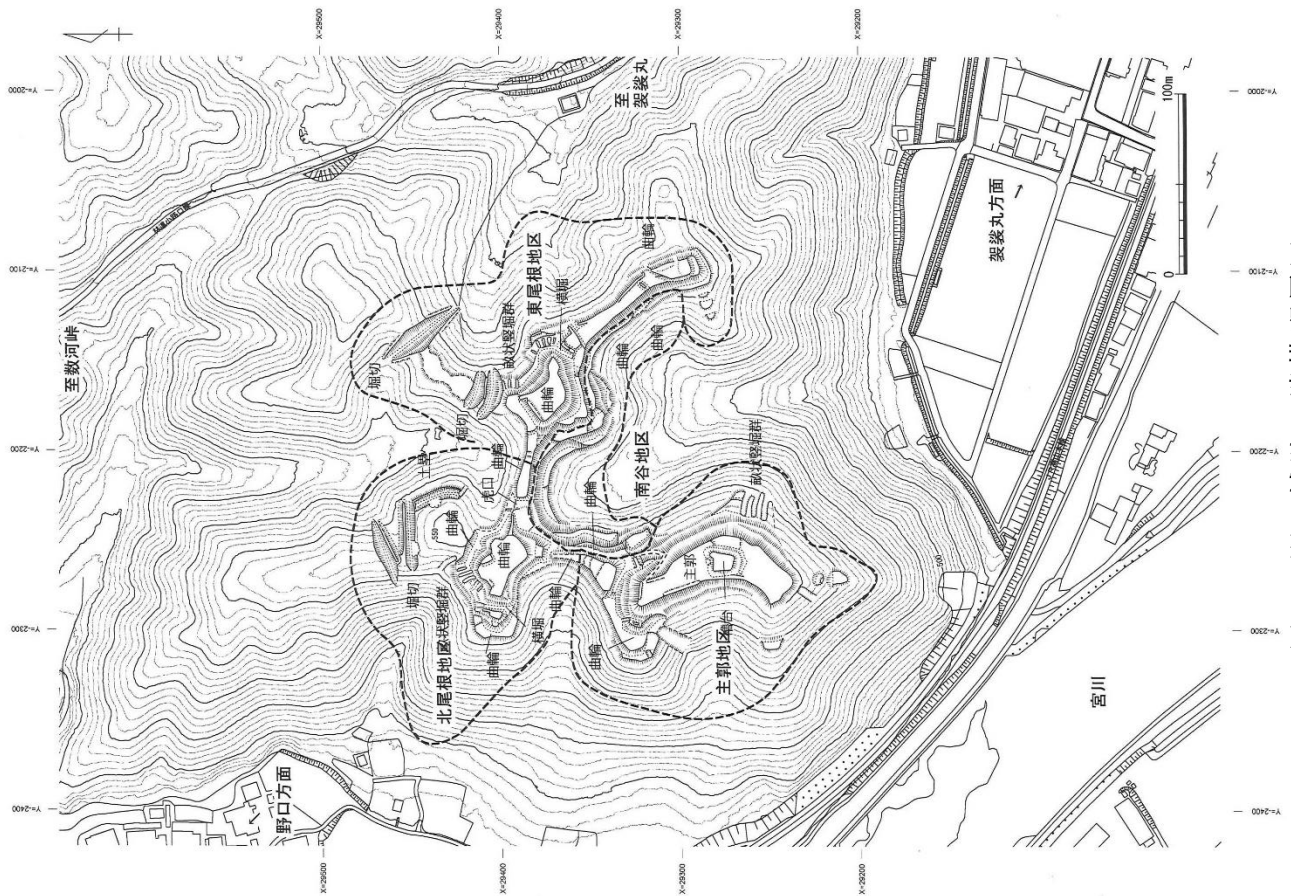


図5 野口城跡 遺構配置図

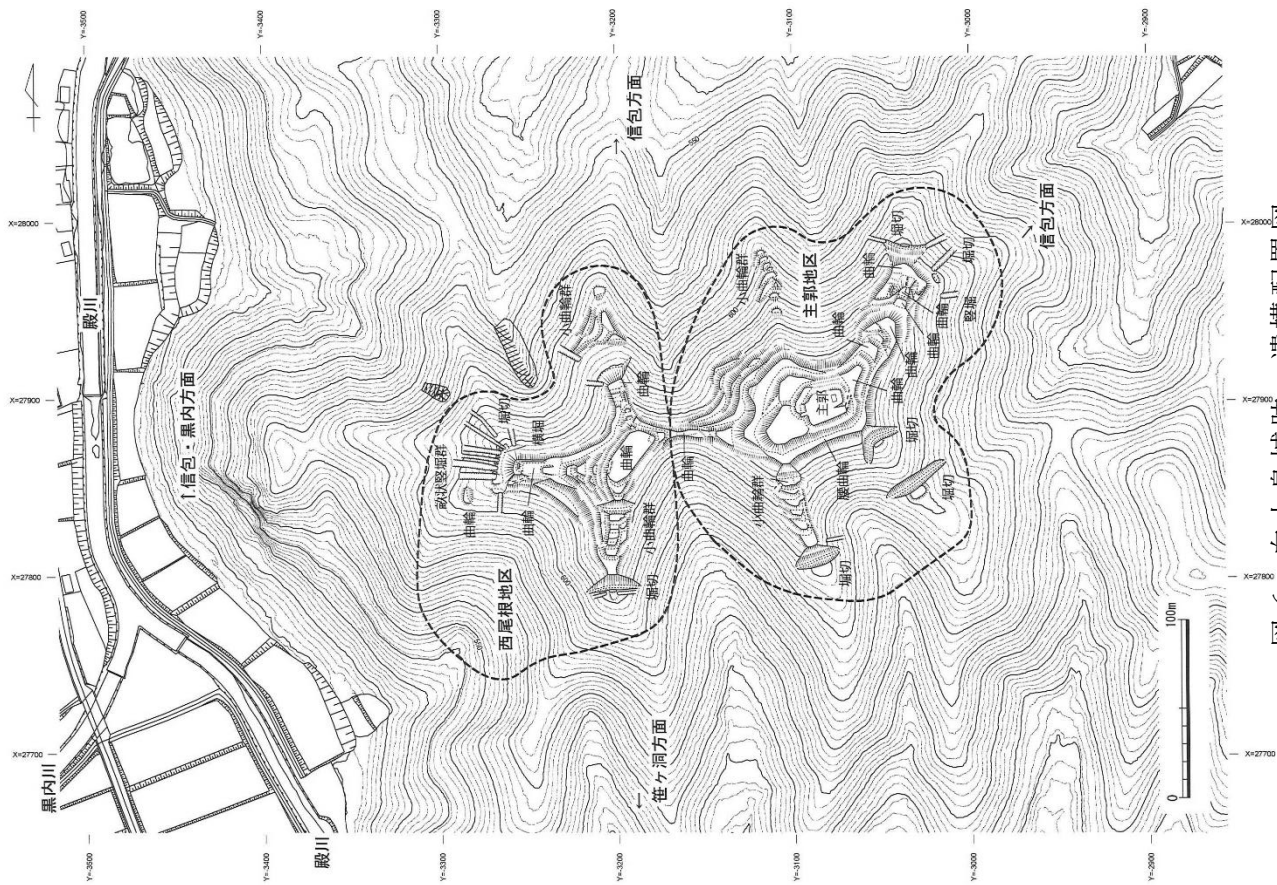


图6 向小島城跡 遺構配置図

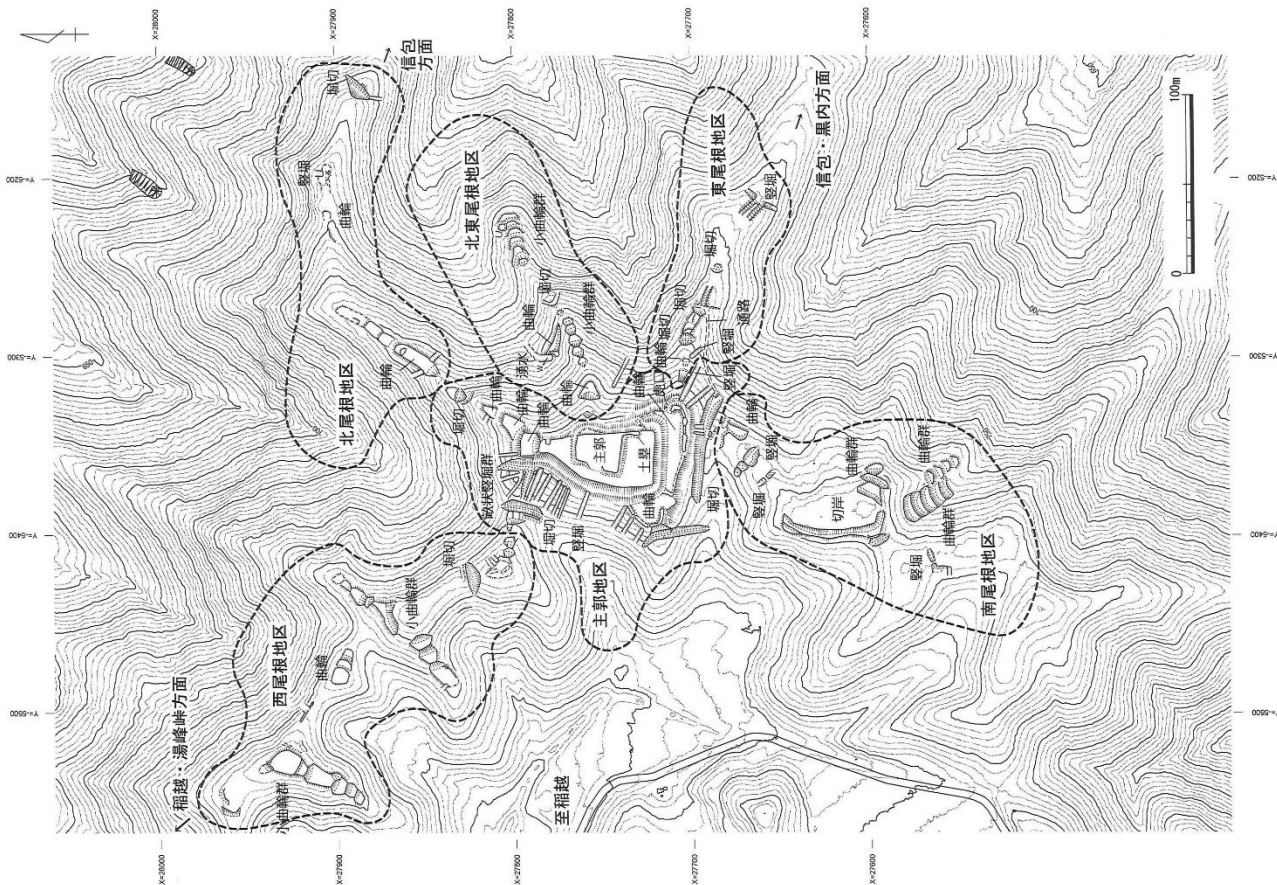


图7 小鷹利城跡 遺構配置図

『夕雲の城』プロジェクトの経緯と展望

関高等学校地域研究部顧問 林 直樹

2019年度 連携のはじまり

富加町と本校の連携がはじまったのは2019年7月のことである。この年、関市から地域の戦国史に関する調査依頼を受けた部員たちは、興味深げにコツコツと文献を読み始めた。このタイミングで遺跡踏査の楽しさを味わってもらおうと、富加町の島田崇正さんに案内をお願いしたところ、ふたつ返事で快諾していただいた。

島田さんは、研究はもちろん普及活動にも熱心で、信長の東美濃征服戦をテーマとした漫画を企画し、地域の方々を巻き込んだ活動を展開している。関高校からほど近く、しかも誰もが知っている織田信長の美濃攻略に関わる山城や古戦場跡を、郷土史・文化財の専門家の案内で歩けば、高校生の意欲も向上するに違いないと考えたのだが、当日の反応やその後の活動への効果は予想以上だった。

ちょうど募集が始まった朝日大学戦国武将作文コンクールへの応募を呼び掛けたところ、ごく短期間のうちに部員ふたりが作文を書きあげた。ともにテーマは「織田信長の東美濃征服戦」。踏査や読書の体験をもとに、みずみずしい文章を書きあげてくれ、ふたりそろって上位入賞。結果を島田さんに報告すると、思わぬ呼びかけをいただいた。翌年3月に富加町で行われる歴史イベントに、高校生の発表の機会を設けるので登壇しないかとお誘いだった。「夕雲の城フェス」と題したこのイベントは、2020年3月開催予定であったが、残念なことにコロナ禍のため中止となった。

2020年度 文化財活用提案の開始

コロナ禍によって学校は休業となり、予定していたフィールドワークはすべて頓挫した。秋以降、ようやく郊外活動が認められるようになり、1年生メンバー5名とともに、島田さんの案内で富加町を訪れた。前回同様、加治田城や堂洞城を踏査し、龍福寺では貴重な古文書や肖像画も見せていただいた。富加町は、史跡の保全や活用に熱心な町である。踏査には、半布里文化遺産活用協議会の皆さんも参加してくださった。清水寺では本尊（木造十一面観音坐像、平安期）を拝観。地域の文化財を大切に守り伝える意義について考えるよい機会となった。

部員がまとめたレポートには、文化財の活用への強い思いがあらわれていた。地域に素晴らしい歴史遺産があるのに多くの人が知らないのではないか。他地域の人にももっと知ってもらいたい。歴史観光ツアーを提案したらどうか…。そんな考えをまとめ応募した結果、全校高校生歴史文化フォーラムに入賞することとなった。

2021年度 活動の広がり

島田さんの案内で、加治田城の遺構を見学した部員は、入賞したレポートの中で、以下の一文をつづっている。

・・実際目で見ると、このころの人の知恵がたくさん詰まっていることが感じられる場であると感じた。敵の行動をよんでいるような細かいけど重要な作りがたくさん施されている。写真や図ではわからない細かな構造がたくさんあるため、この場はぜひこの地についてよく知っている方と行って構造を目で堪能してほしいと思う。

「目で堪能してほしい」との考えは、やがて歴史観光ツアー提案へと発展し、2021

年3月の歴史イベントでの発表につながった。コロナ禍のため中止となった歴史イベントが、オンラインにより1年越しで開催されることになったのである。その後、関係者との討議、リモートを活用したバーチャルツアー実験を経てブラッシュアップした研究成果は、日本考古学協会総会高校生ポスターセッションにおいて優秀賞を受賞した。さらにこの研究内容に、ラフティングボートを利用した川下りからの史跡遠望、ドローンによる山城・古戦場撮影などの実験データを加えた発表は、全国高校生郷土研究発表大会で優秀賞を受賞した。

この年は、高校生のみならず、関市内の小中学生が郷土史研究でめざましい成果を挙げた年でもあった。活動が新聞紙上で取り上げられるようになると、ぜひ研究成果を市民向けに発表してほしいとの要望が地域から寄せられるようになったため、「探ろう！岐阜の歴史」と題した発表会を開催する運びとなった。関市、富加町、本巣市、岐阜市から小中高生が集まり、有意義な交流会が開催できたことを多としたい。

2022年度 歴史漫画の制作

歴史観光ツアーに関する高校生の提案は、その後、様々な経緯を経て、ふたつの事業へと発展する。木曾川下りからの史跡遠望は、木曾川中流域観光振興計画の一環として実施に移された（木曾川下りアイデアソン）。行政機関や関連企業の支援も得られ、関高生だけではなく他校の生徒も参加した意義深いイベントとなった。

もうひとつの事業・漫画制作は、もちろん富加町からの声掛けからはじまった。加治田城二代目城主斎藤新五利治の一代記を漫画にしたい、企画段階からもぜひ高校生に加わってほしいとの大変ありがたい申し出であったが、漫画ともなればフィクションを交えた創作活動となる。地域研究部員のみでは荷が重すぎるため、文芸部員にも参加を呼びかけ合同チームを結成した。

企画名称は「夕雲の城プロジェクト」。もちろん歴史漫画シリーズ第一弾のタイトルに由来する。みのかも定住自立圏の事業として刊行された歴史漫画は、富加町・美濃加茂市・坂祝町の小中生に無料配布されたので、小中生の頃に『夕雲の城』を読んだという部員が8人もいた。島田さんや漫画家の渡辺浩行先生にとっては、感慨ひとしおであるに違いない。

富加町や関市、富山市での史跡踏査を重ね、幾度も討議を行い、時代考証とシナリオ作成を進めた。忙しい中、渡辺先生も参加してくださった。短期大学にお務めであった先生は、教育者としての一面をお持ちであって、生徒に対し、ふたつのミッションを与えてくださった。ひとつは月岡野の戦いのシナリオ作成、もうひとつは実名不明の主人公の妻の命名である。その場に立ち会っていた私は、大丈夫かなと疑念を抱いたが見事に杞憂に終わった。詳しくは漫画をお読みいただきたい。

2023へ 今後の展望

以上、2019年以来の経緯をまとめてみた。詳しくは次頁以降の報告（関高web掲載）を参照されたい。

今回の漫画を機に、斎藤新五とその時代に関する研究を深めると同時に、広く周知を図りたい。研究分野では、新五統治時代及びその前後のこの地域の歴史を、文献や考古資料によって復元していきたい。普及活動では漫画『斎藤新五利治』を軸に、地域の歴史や文化財を周知する活動を展開する予定である。漫画と史跡案内を組み合わせたSNS発信や小中生を対象としたイベント等、現在、企画しているところである。



今回は、富加町と連携した歴史探究フィールドワークについて報告します。

◇ 富加町教育委員会の方々と史跡を見学し、地域の歴史を学びました！

日時：令和元年 7 月 7 日(日) 8:00 ~ 14:00

案内：富加町教育委員会

参加：関高校地域研究部 5 名、岐阜大学学生 1 名、関市役所 2 名

内容：織田信長による中濃攻略戦に関わる山城や古戦場をめぐり、地域の歴史について考える。あわせて、地域の歴史資源の活用について考える。

探訪先：加治田城址、旧加治田城下町、夕田茶臼山古墳(織田信長本陣推定地)、堂洞城址、恵日山(海老山、織田信長本陣推定地)、春日神社、関城址(安桜山)

◇ 富加町の歴史を現地で学び、歴史遺産の活用について考える



加茂郡富加町は、夕田茶臼山(ゆうだちやうすやま)古墳や半布里(はぶり)戸籍をはじめとする歴史遺産に恵まれた町として知られています。

数ある史跡の中で、私たち地域研究部は、中世山城の加治田城や堂洞城に着目しました。織田信長は美濃攻略にあたって、まずは中濃地域にくさびを打ち込みました(『信長公記』)。加治田城や堂洞城は、信長の中濃攻略作戦の古戦場であり、富加町では遺跡の現状を把握するとともに、教育や観光などの分野における活用を図っています。

今回、私たちは、富加町教育委員会の島田崇正さん、山内正明さんの案内で、信長による制圧作戦に関わる古戦場をめぐりました。文献史料から遺跡の現状をどう読み解くか。おふたりによれば、信長の時代からすでに450年を経た今日でも、史料の再検討や遺跡の調査により、新たな事実が判明することがあるそうです。今回のフィールドワークは、歴史の証人でもある貴重な文化財を守る意義について、あらためて考える機会となりました。

◇ 生徒の感想

■ 今回のフィールドワークで改めて感じたこと、それは、信長はやはり賢い武将だということである。信長は美濃攻略の際、敵の本拠地を初めから攻めるのではなく、あえて東美濃から攻略を開始した。交通の要所である加治田や、日本刀の生産地であり経済活動が盛んな関、これらの地域の重要性を理解していたからだろう。こうした、戦いにおける強さだけでなく、賢さを持ち合わせていた信長だからこそ、有力な戦国大名に成り得たのだと思う。



加治田城主、佐藤紀伊守も同様である。今でこそ、信長は戦国時代随一の大名として知られているが、美濃攻略を始めた当時は、尾張を領するだけの一大名だ。そんな時に、周

りを裏切って信長につくという判断を下した佐藤紀伊守。非常に先見の明を持った武将だと言える。

このように、当時の人々が関わった地域や史跡を訪ねることで、その人の考え方まで見えてくるのがとても面白い。これから調べていく明智光秀も、研究をする中で、きっと、今の僕がイメージとは異なることが見えてくるだろう。これからの研究が楽しみだ。

■今日のフィールドワークでは、信長が始めに東美濃を攻めた理由がよくわかりました。一方、自分たちの領地を守ろうとした領主の奮闘を、山城に行くことで肌で感じることができました。また、自分の住んでいる土地にも信長が攻めてきて、地元の領主と戦っていたと思うと感動しました。

今回のフィールドワークで、信長ばかりに光があたりがちだけど、領地を守ろうと頑張っていた領主の戦略が肌で感じられたし、自分の住んでいるところにも信長が来ていたと思うと自分の住んでいる土地に誇りがもてました。

今日一日、ありがとうございました。



今回、富加町教育委員会の方々にお世話になりました。私たちが古墳を観察しやすいように、草刈りをしてくださった地域の方、ありがとうございました。今度は、加治田の旧城下町をじっくり歩き、酒蔵や刀剣工房を訪ねたいと思います。



今回は、朝日大学戦国武将作文コンクールについて報告します。

◇ 地域研究部の生徒 2 名が、最優秀賞・優秀賞を受賞しました！

日時：令和元年9月7日(土) 場所：瑞穂市総合センター

主催：朝日大学 後援：岐阜県教育委員会 NHK 朝日新聞 岐阜新聞

内容：表彰式 公開講座

◇ 受賞作品の研究内容

関高等学校地域研究部では、関市市制 70 周年イベント（戦国☆甲子園）に備え、関市やその周辺地域の戦国時代の歴史について、フィールドワークや勉強会を行っています。このたびの戦国武将作文コンクールにあたり、部員 2 名が、富加町におけるフィールドワークの成果をもとに作文を執筆し応募したところ、石原伶緒さん（2 年生）と山内康誠さん（1 年生）が、それぞれ最優秀賞、優秀賞を受賞しました。

石原さんの「東美濃攻略から見る織田信長」、山内さんの「織田信長、語られない天下布武の第一歩」とともに、フィールドワークの知見や読書の知識を生かした作文で、オリジナリティにあふれたものでした。

午前中の表彰式に続き、午後の部では、本郷和人氏（東京大学教授）から「明智光秀を学ぶ」、巽昌子氏（東京大学特任研究員）から「古文書からみる分国支配」と題した講演がありました。公開ディスカッションでは、本郷氏、巽氏、本校生徒 2 名を含む高校生が登壇し、織田信長が美濃国を攻略した理由、その足がかりとなった東美濃へのフィールドワークをもとに書かれた受賞作について意見が交わされました。

◇ 生徒の感想より

■ 富加町のフィールドワークから考えた信長像についての作文で、朝日大学の戦国武将作文コンクール最優秀賞を受賞した。そして、同大学で行われた表彰式、明智光秀についての公開講座に参加した。

公開講座では、東大史料編纂所の本郷和人先生、巽昌子先生のお話を聞いた。明智光秀について、今まで知らなかったことをたくさん聞くことができた。

また、「信長の考えた天下とは日本のことである。信長は自分の領地を守るためではなく、天下布武、天下統一を成し遂げるために戦っていた」。本郷先生が、このようにおっしゃっていた。僕も同じことを考え、作文にも書いていたので、すごく共感でき、嬉しかった。

2 人の先生方がおっしゃっていた、歴史の研究はフィールドワークが大切だということ、先人の意見を踏まえながら自分の考えを積み重ねていくこと、これら 2 つを忘れず、今後の研究に励んでいきたい。

今回こうして研究したことを文章にすることが、とても楽しかった。理解の助けにもなることだから、これからも研究内容を文章にまとめてみようかと思う。



今回は、半布里文化遺産活用協議会のみなさんとの合同調査の報告です。

◇ 富加町文化遺産活用協議会のみなさんと一緒に、文化財をめぐるしました！

日 程： 2020年10月25日（日） 8：30～16：00
場 所： 富加町内（加治田城、清水寺、龍福寺、堂洞城、夕田茶白山古墳等）
参加者： 地域研究部の生徒5名、半布里文化遺産活用協議会の方々11名
案 内： 島田崇正さん（富加町教育委員会文化財専門官）

◇ 当日の様子

富加町には、旧石器時代の恵日山（えびやま）遺跡や中世の山城、寺院や仏像など、多くの文化財があります。そうした貴重な文化遺産をまちづくりに生かそうと活動している半布里（はぶり）文化遺産活用協議会のみなさんとともに、一日行程でフィールドワークを行いました。案内役は、昨年度に引き続き、富加町教育委員会文化財専門官の島田崇正さんです。概要は以下の通りです。



<加治田城>

郷土資料館駐車場に集合。清水谷川公園から加治田城に登城。加治田城は織田信長による東美濃攻略戦に際し、織田勢に味方した佐藤一族の城。山の各所には堀切、豎堀、虎口といった中世城郭に多く見られる防備のための遺構が見られた。山頂からは岐阜城はもちろんのこと、名古屋のビル街までが見えた（右写真）。

<清水寺本堂>

臨済宗清水寺（きよみずでら）を訪れ、井戸順治さんから説明を受けた。寺伝によると坂上田村麻呂により建立されたという。かつては密教寺院であり、本尊は平安期の木造十一面観世音菩薩坐像である。秘仏であるが特別許可をいただき拝観した（右写真）。定朝様式ではあるが、日本史教科書に登場する通常の寄木造ではなく一木造であった。拝観後は庫裏をお借りして昼食をとる。井戸さんや協議会のみなさんから、お茶やお菓子でもてなしていただいた。



<龍福寺>

臨濟宗龍福寺（りょうふくじ）を訪れ、佐藤紀伊守肖像画や古文書類を見せていただいた。龍福寺は佐藤氏の菩提寺であり、肖像画のほか、室町期から江戸期にかけての古文書類が保管されている。書状や所領安堵状、位牌、木像などの貴重な文化財が今日まできちんと保管されていることに感銘を受けた（右写真）。

今回、清水寺や龍福寺で、私たちのために貴重な文化財を公開していただけたことに、心より感謝申し上げたい。

<堂洞城・夕田茶臼山古墳>

堂洞城は、織田勢を迎え撃った岸一族の居城である。戦の顛末については、信長の一代記である『信長公記』に詳しい。『信長公記』には、信長自らが「高き塚」にて陣頭指揮をとったと記されているが、島田さんはその「高き塚」を、堂洞城のすぐ近くにある夕田茶臼山古墳のことではないかと推測する（右写真、後円部の墳長頂部に立つ）。この古墳は小高い丘に築かれた全長40mほどの前方後円墳で、3世紀前半に築かれたと考えられている。まさに卑弥呼の活躍した時代に築かれたこの古墳の上に、信長がそうとは知らず陣をしいたと聞き、歴史のめぐりあわせの面白さを感じた。



参加者のみなさんの中には、関高の同窓生や保護者の方もいらっしゃって、歴史の話や学校生活の話、文化財の保護や活用の話など、会話もはずみしました。富加町の恵まれた文化遺産をまちづくりにどう生かしたらよいのか。地域研究部も活動の輪に加わり、富加町内の歴史探究やまちづくり提案を進めていく予定です。

今般のコロナ禍で中止のやむなきにいたりましたが、今年の3月21・22日に実施予定であった富加町主催の「夕雲の城フェス」において、本校地域研究部も発表する予定でした。研究者の方々とご一緒できる本格的な戦国シンポジウムであっただけに残念ですが、富加町のみなさんとは、今回のようなつながりをもちながら今後も継続的に研究を続け、文化財を生かしたまちづくりに参加していく予定です。



今回は、みのかも定住自立圏主催の歴史イベント参加報告です！

◇ みのかも定住自立圏とは 美濃加茂市 & 加茂郡市町村の圏域

2009年3月、美濃加茂市が「みのかも定住自立圏」の中心都市宣言を行い、加茂郡市町村（坂祝町・川辺町・富加町・七宗町・白川町・八百津町・東白川村）との間に、順次協定を締結することにより、定住自立圏がかたちづけられました。

定住自立圏では、それぞれの地域が持つ強みを活かし、補完しあいながら圏域全体を活性化させ、「住み続けたい」「住んでみたい」と感じるエリアをめざす事業を行っています。

関高校には、定住自立圏内の市町村から大勢の生徒が通学しています。定住自立圏は、私たちの地元でもあります。関高校の探究活動では、この地域の課題に関し、積極的に取り組んでいきたいと考えています。



美濃加茂市ウェブサイトより転載

◇ おうち de 歴史イベント 夕雲の城（美濃加茂市・富加町・坂祝町主催）

1565（永禄8）年、中濃地区を舞台に、織田氏と斎藤氏の間で大きな戦が行われました。織田軍は、各務原の鶉沼城、坂祝の猿啄（さるばみ）城、美濃加茂・富加の堂洞（どうぼら）城を次々と攻め落とし、最後に、関の安桜山城（関城）を占拠します。

富加町では、マンガ「夕雲の城」を発刊するなど、史実をわかりやすくするための努力を積み重ねてきました。YouTubeライブを活用した今回の企画もその一環であり、さらには、定住自立圏内の歴史遺産を生かしたまちづくりを考えるイベントとして行われました。

◇ 当日の様子

今回、関高校地域研究部は、「信長軍侵攻ルートを訪ねる 夕雲の城ツアー構想」というタイトルで、川下りやバス周遊で歴史遺産をめぐるツアーを提案しました。

続いて、東洋大学の木下聡准教授（関高卒業生）の基調講演「後斎藤氏と織田氏的美濃国攻防史」、美濃加茂市・坂祝町・富加町の市長・町長とマンガ作者の渡辺浩行氏によるトークセッション「地域の歴史資源を生かしたまちづくり」が行われ、最後に、旭堂南海師匠による「歴史講談 夕雲の城」が上演されました。



◇ 富加町との連携の経緯

このイベントへの参加は、前後3回に渡るフィールドワークや古文書勉強会を通じて、富加町教育委員会の文化財専門官、島田崇正さんと、およそ2年間かけて計画したものです。

令和元年7月7日、マンガ「夕雲の城」を現地に携えての一風変わったフィールドワークを行ったのが第一弾でした。フィールドでの鮮烈な印象をまとめた石原伶緒さん、山内康誠さん兩名のレポートは、その年の夏に行われた「戦国武将作文コンテスト」(朝日大学主催)でそれぞれ最優秀賞、優秀賞を受賞しました。

当時の地域研究部は、堂洞合戦の研究に加えて、美濃各地に残る明智光秀伝説について調べていたので、そうした学びの成果を研究者とともに発表してみないかと、島田さんからありがたい提案を受けました。令和2年3月開催予定の「夕雲の城フェス」がそれであり、関高生もポスターセッションや研究発表を行い、パネルディスカッションにも登壇するはずでしたが、新型コロナウイルス感染症により中止となりました。

新年度、新入部員5名を加えた我々はフィールドワーク(計2回)や、富加町の刀鍛冶・吉田研さんの指導で製鉄・刀鍛冶実験(計5回)に参加し、今回のオンラインイベントで、歴史遺産を生かしたまちづくりに関する提案を行うことができました。富加町の歴史遺産には、初期の前方後円墳や正倉院戸籍にもあらわれる半布里の集落跡、平安期の仏像など、まだまだ多くの魅力があります。今後もさらに学びを深めていきたいと考えています。



◇ 生徒代表の感想

美濃加茂市・富加町・坂祝町主催のオンライン歴史イベント「夕雲の城」に参加した。

第一部では、関高校地域研究部が、信長の東美濃攻略の舞台となった歴史スポットをめぐる観光ツアーを発表した。各市町の首長さんや学芸員の方々の前で緊張したが、ツアーの魅力をしっかり伝えることができたと思う。

第二部の木下先生の講演では、古文書などの史料から歴史を復元する手法を学ぶことができた。木下先生は関高の卒業生。歴史学の最前線で活躍するすごい方が先輩にいらっしやることを知り、驚くとともに誇りに感じた。

第三部の首長の皆さんを交えてのトークセッションでは、司会の方から指名を受け、

飛び入りで話す機会を得た。自分自身、美濃加茂市の一市民であり、マンガ「夕雲の城」を読んだ経験を交えつつ、自分たちのツアー提案や、研究を進める中での自分の率直な思いを述べることができた。

美濃加茂市の伊藤市長さんからの「一緒にやりましょう」という言葉はうれしかった。市長さんの言葉を聞き、感謝の気持ちを抱くとともに誇らしい思いがした。今後、私たちは、市長さんや町長さんの期待に応えて、実際のツアーに関する細かな提案を考える予定である。専門家の意見を聞きながら、チームでおたがい忌憚のない意見を述べ合い、実現可能なツアーにするつもりだ。



今回は、「歴史観光・夕雲の城ツアー」構想の報告です。

◇日本考古学協会総会高校生ポスターセッションで、優秀賞を受賞しました！

ポスター公開期間： 5月23日（日）10:00 ～ 6月4日（金）17:00
場 所： 日本考古学協会公式ウェブサイト
参加者： 田中莉子 藤村彩須果 小原和也 河路康太 渡邊貫太 石原伶緒
テーマ： 織田信長の東美濃攻略戦とその関連史跡の活用について
～地域と高等学校の連携による実践報告～

第87回日本考古学協会総会において、2021年高校生ポスターセッションが実施される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、研究発表要旨及びポスターデータによる審査となりました。結果、本校地域研究部の作品が優秀賞に選ばれました。本年度は対面による口頭発表が行われなかったためか、優秀賞3校の発表のみで最優秀賞の選定はありませんでした。本校としては、一昨年最優秀賞受賞に続く上位入賞となりました。

◇ 専門家からのコメント

東北学院大学教授 辻秀人氏（日本考古学協会会長）

地域に残る織田信長の東美濃攻略という歴史動向を示す遺跡群を実際に歩いて現状を確認した上で、高校生の視点で、観光、郷土学習を提案し、イベントを地域の自治体と共同して開催するという実践は大変素晴らしいと思いました。観光では、見学者が一方的な受ける側ではなく、実際に現地を訪れ、滞在し、体験する提案がありました。これからの歴史を生かした観光の一つの在り方を示していると思いました。郷土学習でも座学ではなく、実践が提案されました。ドローンやスマホを使う提案はこれからの一つの方法になると思います。課題とされた、地域や他校と連携した活動は是非頑張って進めていただければと思います。成果を大いに期待しています。

関西外国語大学教授 佐古和枝氏

あくまで個人的な感想ですが、まず、市町村境をこえて、地域に存在する信長の東美濃攻めの関連遺跡を一体のものとしてとらえ、活用していくべきという視点がいいですね。行政主導・地域住民主導の遺跡活用では、どうしても「うちの遺跡」だけになり、なかなか市町村界を越えることは難しいものです。高校生だからこそ、良いと思うことをストレートに提案し、複数の自治体をつなぎ、官と民をつなぎ、高齢者と若者をつなぎ、さまざまなマンパワーを結集させてくれたことは、素晴らしいと思います。高齢者への配慮もあり、スマホなど最新機器を駆使して、新しい感動の伝え方を模索してくれたことも、良かったです。東美濃において関高モデルを作ってもらえれば、全国各地の文化財活用にも参考にされるとと思います。



加治田城下町を見学中のメンバー
造酒屋のご夫婦は関高同窓生

今回は、坂祝町・富加町・美濃加茂市表敬訪問の報告です。

◇ 坂祝町・富加町役場、美濃加茂市役所を訪ね研究成果の報告をしました！

坂祝町役場訪問 令和3年6月3日（木）

柴山佳也 坂祝町長

富加町役場訪問 令和3年6月7日（月）

富加町長 板津徳次

美濃加茂市役所訪問 令和3年6月17日（木）

伊藤誠一 美濃加茂市長

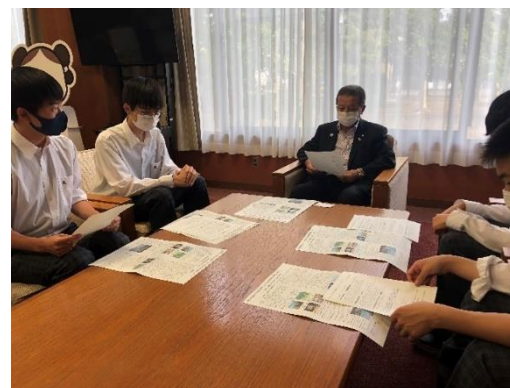
<訪問目的> 日本考古学協会高校生ポスターセッション優秀賞受賞

<参加生徒> 石原伶緒 小原和也 河路康太 渡邊貫太

◇ 当日の様子

美濃加茂市と加茂郡町村は、人口減少・少子高齢化・グローバル化などの諸問題に対応するため、「みのかも定住自立圏」を結成し、防災や様々な分野での連携を強化しています。その定住自立圏構想のシンボリックな事業として、富加町・坂祝町・美濃加茂市の三市町は、「夕雲の城」プロジェクトを推進してきました。「夕雲の城」プロジェクトとは、おもに三市町の領域を舞台に、戦国時代に実際に起きた「織田信長の東美濃攻略戦」に関する学術研究や、歴史資源を生かしたまちづくりの活動を指します。これまでに三市町では、歴史マンガの制作と発刊、様々な歴史イベントの企画など、斬新な取り組みをしています。そうした動きに呼応し、関高地域研究部では、東美濃攻略戦に関わる歴史研究やまちづくり提案を行っています。このたび、そうした取り組みが評価され、日本考古学協会で表彰されましたので、ご支援・ご協力へのお礼もかねて、各町役場、市役所を訪問し、柴山佳也坂祝町長さん、板津徳次富加町長さん、伊藤誠一美濃加茂市長さんを訪問し、研究の経緯やこれからの抱負をご報告いたしました。

坂祝町長さんからは、旧中山道及び河川公園の整備のお話や、災害対策に万全を期しながらも川との共存をめざす町の方針についてうかがいました。富加町長さんからは、郷土の歴史の大切さを地域の方々にわかっていただくことがまちづくりの基本であるとの話をうかがいました。美濃加茂市長さんからは、現在、計画途中であるメディカルツアー構想の中に、歴史観光ツーリズムを取り込みたいとのご提案をいただきました。関高校地域研究部は、今後も地元自治体や関係団体、個人と連携し、歴史遺産を生かしたまちづくりに対し、積極的に取り組んでいきます。



（写真：上から坂祝町、富加町、美濃加茂市で撮影）

Seki Bridge Journal 第11号 2021.7.29

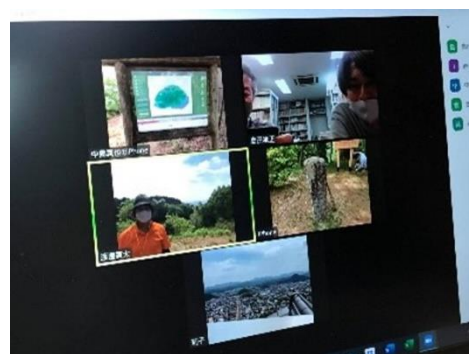
今回は、歴史観光ツアー提案に向けての具体的な実践報告です。

◇ ズームアプリを利用したライブ中継の実験を行いました！

日時： 令和3年4月24日（土）13:00～15:30
場所： 富加町郷土資料館 堂洞城 夕田茶臼山古墳 関城 伊木山城
参加： 地域研究部 富加町 半布里文化遺産活用協議会 関高卒業生

4月13日の検討会では、旅行社側から「歴史ツアーのコアな客層はシニア層であるから、ボートの川下りや、複数の山城登山はあまりに危険である」との指摘を受けました（関ブリッジジャーナル第5号参照）。とはいえ「山城からの眺望を高齢の方々にもぜひ味わっていただきたい」と考えた地域研究部員は、ズームによるバーチャル歴史ツアーを思いつきました。高校生が各地の山城に登り、スマホやタブレットでライブ中継し、ホールで上映するという企画です。これなら、高齢の方々にも楽しんでいただけますし、バス周遊との組み合わせも可能です。これならいけると、旅行社の方からも太鼓判をいただきました。

4月24日に、関係者の方々のご協力により、ズーム中継実験を行ってみました。山城からの眺めや遺構の様子もよくうつっていき、風にそよぐ若葉の音や野鳥の鳴き声まで聞こえ、予想以上の成功でした。



（写真：ズームによるライブ中継の様子）

◇ ラフティングボートで川下りをしながらのライブ中継実験を行いました！

日時： 令和3年6月20日（日）9:00～12:00
場所： 美濃加茂市リバーポートパーク 美濃加茂市・犬山市間の川下り
協力： アースシップ 美濃加茂市 富加町

織田信長の東美濃攻略戦のヤマ場のひとつが、木曾川沿いの猿啄城攻防戦です。江戸期の軍記には、織田勢は犬山側から坂祝側へ「栗栖の渡し」を使って渡ったと伝えられています。今回、地域研究部では、栗栖の渡しと猿啄城のボート上からのライブ中継を、運営会社であるアースシップに提案したところ、代表の水口晶さんに承諾していただきました。

川下り当日は、前日までの不安定な天候も収まり、晴れ模様の中、スマートフォンを使用してのライブ中継を成功させることができました。

通常、リバースポーツのメインターゲットは若者やファミリーであり、シニアの多い歴史ツアーとは客層が異なります。ただ、若者の中にも、ゲームやマンガを通じて戦国時代に関心を持つ層が一定数いることから、川下りを通じて、歴史ツアーの新しい客層を掘り起こすことが可能となるかも知れません。アースシップの水口さんも、川下りのプログラムの中に歴史ガイドを取り込んでいきたいとおっしゃって



いました。様々な可能性が広がった一日でした。

(写真：ラフティングボートの様子)

◇ 山城や古戦場のドローン撮影を行いました！

<第1回>

日時： 令和3年6月29日(火) 13:00 ~ 15:30

場所： 犬山城 伊木山城 鶺沼城 栗栖の渡し 猿啄城

<第2回>

日時： 令和3年7月10日(土) 9:00 ~ 12:00

場所： 加治田城 堂洞城 夕田茶白山古墳 関城

協力： 富加町 株式会社ROBOZ
SEALAND-SKY



関高校の探究活動では、昨年度からドローン撮影を取り入れています。昨年度は、専門家から指導を受けた生徒が、ドローンで撮影した関市や美濃市の映像を観光動画制作に活用しました(写真：撮影の様子)。

歴史観光「夕雲の城」ツアーの中で企画したバーチャル歴史ツアーの中に、ドローンで撮影した動画を活用することはできないか。今年度は、織田信長の東美濃攻略戦の舞台となった古戦場や山城をめぐり、ドローンで上空から撮影することにし、2回に分けて撮影を行いました。

ドローンで山城を撮影すると、地上や山頂からとはまったく異なる光景が見え、山城間の位置関係や地理的な環境が一目瞭然です。



左上の写真は、織田軍による東美濃攻略の起点となった犬山城、美濃側に築いた最初の拠点伊木山城、伊木山城から攻め最初に奪った斎藤方の拠点鶺沼城の様子です。左下の写真は、激しい合戦の場となった堂洞城とその周辺の史跡の様子です。

写真左奥には、織田方に内応した加治田城、中央には堂洞城、右手前には織田信長本陣と目される夕田茶白山古墳が所在します。夕田茶白山古墳は3世紀後半に築かれた東海地方最古級の前方後円墳で、写真では墳形の様子もよくわかります。

こうした動画を取り込めば、ホールで上映するバーチャル歴史ツ

アーはより臨場感のあるものとなりますし、写真として博物館施設で活用することも可能です。

今回は、地元自治体や企業のみなさんのご協力を得ながら、ツアー計画をよりよいかたちに仕上げるための実験を色々行うことができました。

Seki Bridge Journal 第24号 2021.10.4

今回は 地域研究部による全国高等学校郷土研究発表大会 の報告です。

◇ 富加町・美濃加茂市・坂祝町と連携した研究で優秀賞を受賞しました！

主催： 都道府県高文連郷土研究部会 後援： 全国高文連
趣旨： 高校生による郷土研究や社会科学的な実践報告を発表する全国大会として開催

審査： 2021年8月、発表データの審査を実施（感染症対策のため大会は中止）

受賞対象： 公共・政策部門

歴史ツアー「夕雲の城」構想の実現に向けて

～高等学校と地域の連携による歴史遺産活用の実践報告～

発表者： 河路康太 小原和也 渡邊貫太 （2年） 石原伶緒 （3年）

◇ 受賞作品の概要と今後の展望

■今年度の高文連郷土研究部門の全国大会は鳥取県で開催される予定でしたが、感染症への対応を考慮し、残念ながら現地での開催は中止となりました。代わって、発表の様子を撮影した動画もしくは音声を重ねたスライドを作成したデータの審査を行いました。

本校は、パワーポイントで作成したスライドに音声を重ねたデータ提出し、結果、公共・政策部門において優秀賞を受賞しました（写真：録音の様子）。今回は、最優秀賞は該当なしということで、優秀賞が最上位の受賞となりました。

■今回は、2019年以来、地域と連携しながら継続している「織田信長の東美濃攻略戦」をテーマに発表を行いました。地域の貴重な歴史遺産をどのように活用すべきか。私たち地域研究部は、今年の5月、日本考古学協会高校生ポスターセッションにおいて、同様のテーマで優秀賞を受賞していますが、その後、ラフティングボートによる川下りやドローン撮影を実践し、さらに研究内容を深めています。また関係市町の市長さん、町長さんに、研究成果を報告し、ツアーに関する様々なご助言をいただいています。今回の発表にはそうした新たな成果を盛り込みました。

今回の受賞について、関係市町の市長さん、町長さんにも報告したところ、「ツアーは必ず実現しよう」と、激励の言葉をいただいています。今、私たちは、「夕雲の城」ツアーの内容をより現実的なものにするための提案を考えているところです。ズームを使ったバーチャル山城ツアー、「夕雲の城」「猿啄城の春」に続く第3弾の漫画作品の企画など、一歩ずつ進めています。

私たちがツアーの宿泊地に想定している関市小瀬での鶺鴒研究も、別のグループが同時に研究を展開しています。中間報告は、今年の12月12日、関市の観光交流施設「せきてらす」でのイベント「探ろう！岐阜の歴史」において実施する予定です。



今回は「探ろう！岐阜の歴史」の事業報告です。(関高校関連を抜粋)

◇ 岐阜の郷土史を学ぶ小中高生の発表交流会を開催しました！

主催： 関高校・関市・関市観光協会 共催
日時： 12月12日(日) 10:00～15:30
場所： せきてらす 関市平和通4-12-1
発表内容

「船来山古墳群」	本巣市 子ども学芸員
「塚原遺跡と昔の暮らし」	旭ヶ丘中学校
「関市の古墳」	安桜小学校
「歴史観光・夕雲の城ツアー」	関高等学校
「関ヶ原の合戦と国友の鉄砲」	鶯谷中学校
「小瀬鶉飼」 民俗編・自然科学編	関高等学校
※ポスター掲示参加	富加小学校

見学会（刀剣鍛錬） 吉田研刀匠
座談会 橋本裕子先生（中部学院大学）、関係市町の文化財担当のみなさん

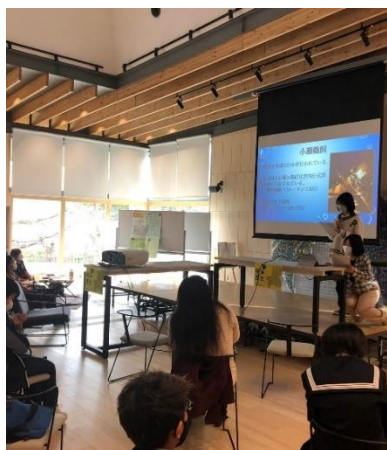
本巣市、岐阜市、富加町、関市に立地する小中学校から、郷土の歴史を探究している児童・生徒が集まり、発表交流会を行いました。それぞれの研究に関わった自治体職員や教職員の皆さん、歴史に関心のある市民の方々、保護者の方々、総勢50名を超える参加者があり、発表会は盛況でした。コメンテーターには中部学院大学の橋本裕子先生（考古学）をお招きし、ひとつひとつの研究に対し、ていねいなコメントをいただきました。

発表作品の中には、「キッズ考古学新聞コンテスト」や「日本考古学協会総会高校生ポスターセッション」、「全国高校生歴史文化フォーラム」など、全国コンクール出展作品・受賞作品もあり、聞きごたえも見ごたえも十分でした。

参加者による発表のあとは、吉田研刀匠による日本刀鍛錬の実演及び体験、参加者全員による座談会もあり、世代・地域・立場を越えた幅広い交流会となりました。

小中高生交流イベント「探ろう！岐阜の歴史」は、次年度も実施予定です。

◇ 発表者の皆さんの感想



今回のイベントでは、地域の歴史を研究する小・中学生の皆さんとの交流で「このような視点があるのか」と様々なことを学ぶことができました。また専門家の方のお話を伺って研究の方針の立て方や発表をする際の表現の仕方など細かい所の指摘を受け貴重な時間を過ごせたなと感じました。

私たちの研究はまだ始めたばかりで、鶉飼を民俗学の視点で調査する際の意味や目的がきっちりと定まっていな面がありました。そのため、これからの研究では民俗学をより広い視点で見ることに深く内容の濃いものにするを目標とし、一体感のある研究に仕上げたいです。
(関高等学校2年 藤村彩須果)

いつも高校生の発表を聞いている自分たちが、小学生・中学生の発表を聞いて、勝手に自分の小中学生の頃と比べ、みんなすごいと思いながら聞いていました。

旭ヶ丘中学高校の発表の中で、自分の身長を基準として古墳の高さを測っていて、後からそれが学術的に正しいということが分かって面白かったです。鶯谷中学校の発表では、関ヶ原の戦いで矛盾点を人口密度という観点から示していて、とても興味深かったです。子ども学芸員の活動に関しては、船来山古墳群の広報活動の方法を考えるにあたって、私たちのツアー提案が何か良いヒントになったのであればうれしく思います。私たちの「夕雲の城ツアー」の活動は、今回のイベントを弾みに、これからさらにブラッシュアップを目指します。

今回のイベントでは様々な年齢の、様々な発表を聞き専門家の方のお話を伺うことができました。とても楽しく、貴重な時間を過ごせたと思います。来年またこのようなイベントが開催されたら参加したいと思います。（関高等学校2年 河路康太）

◇ 橋本裕子先生からのコメント

午前の部では小学校から高等学校までの児童・生徒等による研究発表が行われた。口頭発表は6演題、ポスターによる発表が1演題の合計7つの発表があり、各研究発表に関するコメントは以下のとおりである。

いずれの発表も出身地や学校周辺の歴史や民俗を大事に思い、更に興味を掘り下げる研究が多く、地元愛を感じる内容であった。また小学生と中学生の発表は、全てkid's考古学研究所主催の新聞コンクールの2020年度、2021年度の最優秀賞、優秀賞、最終選考作品となった発表者によるもので、遺跡への興味や愛情、知への欲求が感じられる発表であった。高校生は専門的な学会での発表・入賞や地域振興とのコラボレーション研究などがあり、より専門性の高い発表であった。

「歴史観光・夕雲の城ツアー」 関高等学校

地域とのコラボレーション企画で、戦国の史跡をめぐるツアー。自治体や企業、NPOの協力を得ながら歴史ツアーへとつながるものであった。織田信長の城攻めと同じルートを巡るプランで、山城を登り、ラフティングボートで川から城を仰ぎ見るなどの魅力的なツアー。歴史ツアーは年齢層が高いことが多いことなどから現実的でないと企業側からの指摘に、オンラインシステムを利用した、ズームでの視聴型ツアーという新しい提案。全体的によく練られており実現可能のようだ。ただ、体験することに重点が置かれていたのは気になった。映像で該当場所の臨場感を見せることに意識が集中し、城や陣が置かれた場所の標高や距離などの数字が示されないために、実際の高さや距離感の想像が難しい。映像に実際の数字や距離がインサートで示されるなど、見る側に大切な情報を盛り込むことが必要に思えた。更に、歴史書に記載された事項を体験できるように、史実として分かっているタイムテーブルに沿った時間の情景を示すために、その時間の状況写真などがインサートされたりすると更に良いと感じた。城攻めの開始時間、終了時間など、刻々と変わる時間の流れを体感できる方が、より満足度は高くなりそうである。当時の携帯食などが、ランチの一部として提供されても面白いであろう。特に実際の城攻めを終えた時間は非常に遅く、陽が落ちて真っ暗な状況であったことが分かっている。時々刻々と移り変わるタイム・スケールが体験できるとドキドキワクワクが増すのではないかと思う。更に良いプランへとブラッシュアップが可能な研究発表であった。

午後の最後に、総合討論のような形で発表者と専門家や文化財担当職員との対話が行われた。私からの総合コメントとして、今回の開催主題として「探ろう！岐阜の歴史」なのに対し、全ての発表には遺跡などのピンポイントの地図しか示されず、岐阜県のどの位置に所在するのかという広域地図がなかった点を指摘した。今回は地域をよく知

る人たちへの発表ではあったが、いずれの発表も我が町の遺跡を見に来てほしいという願いを持つ発表であったため、岐阜県のどの位置にあるのか、またアクセス方法などの情報が盛り込まれれば、観光で訪れる人にも遺跡の所在する地域に住む人にも「実際に行ってみよう」という気にさせられるのではないかと意見した。

学生の頃に考古学を研究し、卒業後もそれを職業にしているという人は、考古学専攻生全体の数からすると多くはない。そのため、どの地域に行っても文化財担当職員や大学教員は年齢が多少離れていても知人であることが多い。知り合いではなくとも、お互いの名前を聞いたことや、研究論文を読んだことがあるということが殆どである。今回、大学に籍を置く私と会場となった関市をはじめ周辺地域の文化財担当職員は、学生の頃からの友人や研究や学会を通して知り合い、10年以上の付き合いになるもの同士が多かった。発表した児童や学生たちと同じように、歴史好き、遺跡好きの集まりが大人になっても継続しているという友人関係で、恐らく今後も一生の付き合いとなると信じる友となっている。今回、発表した児童や生徒たち全てが考古学に関係する職業につくかはまだわからないが、今日この場で出会ったそれぞれが、歴史好きの仲間として一生の友との出会いの日になったのなら幸いである。

今後このような会が継続して開催されることを望みたい。

◇ 指導に当たった文化財担当の方からのコメント

日頃から歴史探究に熱心に活動しておられる小中学生そして高校生のみなさんが一同に会して研究を発表する「探ろう！岐阜の歴史」は、聴講した皆さんに様々な感動をもたらしたと思います。高校生の皆さんの発表は、歴史事象の整理だけでなく自分なりの解釈や提案まで深めていてさすがでしたね。また皆さんフィールドワークを大切にしている点には感心しました。「現場百回」ではないですが、現地や実物を自分の目で見て考える事はとても大切です。ぜひ続けてください。

小中学生の皆さんは、自分たちのすぐ近くにある歴史資料への率直な疑問や驚き、大事さを伝えたいという熱い気持ちをととても素直に表現をしてくれて、皆さんのワクワクやドキドキが私たちにも伝わって思わず笑みがこぼれてしまいました。私もそうだったなあと数十年前を思い出しました。歴史の道を志す者の原点を確認させてもらった気がします。現代を生きる私たちの周りには、過去を生きた人々の無数の痕跡が残っていて、神社や仏閣など目に見えるものだけでなく、時には土の中に埋まっている未発見の遺跡だったり、口伝えの伝承や伝統芸能のように形をもたないものなど様々です。ただひっそりと地域に残ってきて、気づかないだけで私たちの暮らしの中に存在しているのです。こうした歴史資料に目を向けて大切に気づいた時、過去と私の繋がりにハッと感動し、歴史の中の私たちを考えるようになるのではないのでしょうか。そして、その資料を残した地域の素晴らしさにも気づき、それが愛情や愛着に変わっていくのだと思います。発表して下さった皆さんはもうすでにその感動を味わっていることでしょう。その感覚を大人になっても大切にしたいと思いました。

(富加町教育委員会文化財専門官 島田崇正)

Seki Bridge Journal 第10号 2022.8.1

今回は、郷土の戦国武将・斎藤新五を主人公とした漫画制作の報告です。

◇ 本校文芸部・地域研究部が、企画段階から参加することになりました！

5年前、富加町教育委員会は、郷土の戦国時代を舞台とした歴史漫画「夕雲の城」「猿啄の春」を発刊しました（下写真）。この事業は「みのかも定住自立圏」構想のイベントとして行われたものであり、完成した漫画は、富加町・美濃加茂市・坂祝町の小中学生に配付されました。このたび、その第3弾「斎藤新五利治」の制作が決定し、本校文芸部・地域研究部が、企画段階から参加しています。メンバーには、小学生の頃に「夕雲の城」を読んだ生徒も複数加わっています。



主人公の斎藤新五利治は第2代加治田城主で、織田信長の馬廻り衆（親衛隊）を務めた人物です。美濃出身であり斎藤道三の一族であったことでも知られています（末子説が有力）。日本史教科書にも掲載されている姉川の戦い、石山合戦、伊勢長島一向一揆、中国攻めなどの戦いに従軍し、最後は本能寺の変で討死を遂げました。織田家の家臣の中でも重要な役割を果たしているにも関わらず、地元の岐阜県ではそれほど知られていません。

富加町を中心とした中濃地域には、斎藤新五ゆかりの史跡や文化財が多数あります。文芸部・地域研究部合同チームのメンバーは、今回の歴史漫画発刊を機に郷土史への関心が一層高まるよう、様々な企画に熱心に参加しています。

◇ 富加町内フィールドワーク & ミーティング 2022/5/15

- 午前 富加町郷土資料館集合 清水寺十一面観音拝観後、加治田城踏査。
午後 龍福寺にて、墓碑・紀伊守肖像画・斎藤新五裏判・位牌調査。
漫画家の渡辺浩行先生を囲んでのミーティング。
- ・渡辺先生から漫画の構想についての話
 - ・感想や疑問点、漫画制作や今後の活用に向けての意見交換
 - ・YouTube用動画の撮影、町広報誌の取材

いつもお世話になっている島田崇正さん（富加町文化財専門官）が史跡案内をしてくださいました（左写真）。堅堀・切岸・虎口など、嚴重に固められた加治田城の遺構、佐藤紀伊守の肖像画や斎藤新五自筆の書状、紀伊守父娘の墓石など、大切に守られた文化財の数々には、ホンモノのもつ魅力があります。この素晴らしさを伝えるためには、どのような方法が有効か。踏査の終わったあと、一同で意見を出し合いました。



漫画家の渡辺先生からは「関高生に月岡野の戦いのシナリオ作りを任せたい」と、突然の提案が寄せられました。仰天しながらも生徒たちは即座に「やります」との返答。古文書や研究書を読みながら史実を見極め、史実と史実の間を創作で埋める共同作業が始まること

になりました。

◇ 富加町「郷土の偉人マンガ制作活用プロジェクト」会議 2022/7/13

関高生4名（文芸部員2名・地域研究部員2名）が、富加町教育委員会からご指名をいただき、「郷土の偉人マンガ制作活用プロジェクト」会議に参加しました（会議の様子、下写真）。冒頭、今回の制作事業がB&G財団からの補助を受けて行うものであることや、郷土の偉人の顕彰事業であることに関する説明がありました。

漫画家の渡辺浩行先生、木曾川下り復活プロジェクトでお世話になっている水口晶さん（アースシップ代表）、歴史小説「堂洞の人質」の作者中島真也さん、富加町の関係者の皆様方（文化財審議会・社会教育委員会・文化遺産活用協議会・教育委員会）が多数参加される中、自分たちの考えをはっきりと伝える高校生の姿が印象的でした。



◇ 富山 ～斎藤新五・越中攻めの足跡を訪ねて～ 2022/7/28

富加町教育委員会の企画で、斎藤新五の越中攻めをテーマとしたフィールドワークに参加しました。1日かけて、富山城、大泉城、太田本郷城、津毛城、月岡野古戦場推定地、江馬氏居館跡をまわりました。

天正6（1578）年、上杉謙信が死去すると、織田信長はこの機を逃さず越中攻略をめざします。まずは神保長住を越中に送り込み、攻め手の大将として送り込まれたのは、加治田城主の斎藤新五でした。新五の侵攻ルートに関する細かな記録は残されていませんが、当時の状況から考えて、加治田から飛騨街道を北上し、今日の国道41号線沿いのルートをとったものと思われます。



まずは富山城の郷土博物館を訪ね、学芸員で中世史家の萩原大輔さんから、織田軍の越中攻めや斎藤新五の果たした役割について説明していただきました（富山城石垣解説の様子、左写真）。

続いて、富山市街地から南に下った大泉城跡を訪ねました。大泉城は、上杉方の武将、河田長親が立て籠もったことで知られる城で、合戦の際に城下が焼き払われたと伝えられています。

大泉城から南に下った太田本郷城を拠点とした斎藤新五は、さらに南に位置する津毛（つけ）城の神保長住とともに、上杉勢に大打撃を与えたことが史書に記されています。

今回、富山市埋蔵文化財センターの堀内大介さんに、太田本郷城や津毛城、月岡野古戦場推定地を案内していただきました。実際に現地を歩いてみると、古文書や史書に現れる合戦の様子が目に浮かびます。

今回のフィールドワークでそれぞれが感じたこと、考えたことを参加者全員で共有し、8月中に「月岡野の戦い」のシナリオを執筆し、渡辺先生に提出する予定です。



Seki Bridge Journal 第14号 2022.8.25

今回は、歴史漫画「齋藤新五利治」制作の活動報告です。

◇ コミュニティFMに出演し歴史漫画制作について語りました！

【放送日程】8月24日(水) 18:00~18:20
【番組名】JUSTMIKA Life 76.8MHz (周波数)

富加町で歴史漫画「齋藤新五利治」を制作中。関高生もシナリオ作りに参加しています。平山華音さん(2年)、鈴木遥斗さん(2年)が、富加町役場提供の広報番組「JUSTMIKA Life」に出演しました。平山さんは文芸部員、鈴木さんは地域研究部員です。18日の収録では、パーソナリティーの山内正明さん(富加町役場)の軽快なトークに合わせ、文芸創作と歴史探究というそれぞれの立場から、この歴史漫画制作にける意気込みについて語りました。



◇ 漫画のシナリオ作りの会議を開催しました！

日時：2022年8月22日(火) 場所：関高等学校
参加者：渡辺浩行氏(漫画家) 島田崇正氏(富加島教育委員会)
関高生4名 関高卒業生2名

今回、関高生は、武将としての齋藤新五のクライマックスともいえる「月岡野の戦い」のシナリオを担当します。生徒の作った7つのシナリオ案をもとに、参加者全員で丁寧に話し合いを進め、シナリオをまとめあげました。史実の重みを踏まえた上で、その間隙を埋めていく作業は、心地よい緊張感を伴うものでした。中濃地方の領主であり、織田信長の馬廻衆であった齋藤新五を主人公とした歴史漫画は、今年度3月に刊行予定です。



Seki Bridge Journal 第56号 2023.3.25

今回は、歴史漫画刊行イベントに関わる現地踏査の報告です。

◇ 関市・富加町の関連史跡、古い町並みの踏査を行いました！

日時： 令和5年2月5日（日）8:30～16:00
場所： 関城及び関町（午前） 加治田城下町（午後）
参加： 関市文化財保護センター 富加町教育委員会 関高校地域研究部、文芸部
指導： 森島一貴氏（関市文化財保護センター） 島田崇正氏（富加町教育委員会）

◇ 関城及び関町の踏査 ～生徒のフィールドメモより抜粋～

森島さんの案内で善光寺から安桜山に登った。岐阜城、伊吹山、白山、御嶽山、猿啄城が一望の下である（右写真）。山頂付近で戦国期の関城の遺構を見学した。竪掘や曲輪、切岸など、明瞭な遺構は北側に残る。不思議なことに関町側の南斜面にはない。南斜面から本町方面に出て、新町を通り新長谷寺へ向かう。室町期にさかのぼる境内の建物群は国指定重要文化財。さらに南に歩き春日神社へ移動した。祭神は関鍛冶の守護神。境内の能舞台で刀鍛冶が自ら能を演じ奉納したという。神社から西に向い関川を渡ると観光施設せきてらすがある。地下には、室町期の大規模な鍛冶工房古町遺跡が眠っている。徒歩で3時間ほどのコース。



◇ 加治田城下町の踏査 ～生徒のフィールドメモより抜粋～



関町探訪のあと、午後は島田さんの案内で、加治田城下町を歩いた。『信長公記』によれば、城下には、佐藤紀伊守父子がそれぞれ屋敷を構えていたという。文献や古地図、踏査をもとにした島田さんの推論を聞き現地を歩いた。土手のような龍福寺参道が、武家屋敷の土塁だったと聞き驚いた（左写真）。そのあと、川浦川沿いの石垣を案内していただく。大商人平井家の敷地内にあった水車小屋の基礎だという。伝承によれば、加治田城の石垣を崩して運んだものだそうだ。松井

屋酒造のご主人、酒向嘉彦さんのお話では、護岸工事で破壊されるはずだった石垣を、施工業者に頼んでそのまま残したものだという。文化財は偶然残されるものではなく、地域の方々の見識や郷土愛があってこそ守られるものだということがよくわかった。

◇ 史跡マップと散策ルートの構想

津保川をはさんで対峙する関と加治田には、中世の山城と町がそれぞれ形成されていた。関は美濃斎藤氏の重臣長井氏の支配下であり、一方の加治田の佐藤氏は織田氏に従属したため、両者の間で合戦も行われた（加治田・関合戦、右写真はその古戦場の絹丸）。近世を迎えると、関は門前町・職人町として、加治田は宿場町として大いに栄えた。次年度は、『斎藤新五利治』に登場するこのふたつの町をつないで、「史跡マップ」や「散策ルート」をつくる予定である。



Seki Bridge Journal 第65号 2023.3.31

今回は、歴史漫画刊行イベント『斎藤新五利治』の報告です。

◇ 研究者、漫画家、地域の皆さん、様々な方々とイベントに参加しました！

日時： 令和5年3月26日（日）13:00～16:15

場所： タウンホールとみか 大ホール

第一部：

報告「加治田城主斎藤新五利治とその生涯」 山内正明氏（富加町役場）
「歴史マンガ制作 地域の歴史を生かす実践報告」 地域研究部・文芸部
講演「戦国越中と月岡野合戦」 萩原大輔氏（富山市郷土博物館）
「戦国飛騨の街道と山城」 三好清超氏（飛騨市教育委員会）
パネルトーク コーディネーター 島田崇正氏（富加町教委）
渡辺浩行氏（漫画家） 山内正明氏 萩原大輔氏 三好清超氏
関高等学校地域研究部 杉浦良太郎代表 同文芸部 平山華音代表
関高等学校地域研究部 林直樹顧問

◇ 当日の様子 ～生徒の感想から～

美濃、飛騨、越中の地元で研究を続けている専門家による発表は、聞きごたえ十分でした。最先端の調査成果をわかりやすくお話いただけ、大変ためになりました。興味深かった点をいくつかあげてみます。

・京都阿弥陀寺の斎藤新五の墓石に刻まれた文章の分析について。墓自体は、江戸時代前期に作られたと考えられているが、すでに斎藤家の加治田支配が終焉を迎えていたにも関わらず、「かちたのしろぬし」（加治田の城主）、「きふのふなかふしの御とも也」（岐阜信長父子の御供なり）と、新五の業績が正しく伝えられていることに、驚きつつも感動しました。

・飛騨の勢力のうち、上杉方に近い江馬氏が越中東街道を、織田方の姉小路氏が越中西街道をそれぞれ支配していたことから、新五の越中攻めルートは西街道だったとの推測が成り立つとお話をうかがいました。考古学調査からわかる山城分布からみると、そのような考えができるということです。地道な学問成果の素晴らしさを知りました。

・私たちは、月岡野の戦いのシナリオを書く際、萩原大輔さんの「自焼没落説」（上杉方が根城を織田方に渡さないよう自身で火を放って退散したとの説）を参考にしました。ところが萩原さんは講演の中で、織田方が火を放って上杉方を挑発した可能性も残されているとお話されていたので驚きました。歴史学・考古学は、様々な資料を駆使して歴史を復元していくのであって、資料をどう読み解き解釈するかで歴史理解がかわっていくのだなということ、今回、目の当たりにしたような気がします。

最後にパネルトークについて。研究者の方々や漫画の渡辺先生と一緒に壇上に上がり、とても緊張しましたが、始まったあとは楽しい時間を過ごせました。歴史学や考古学の地道な研究性によって歴史像が描かれ、さらに、漫画家や高校生の手によって、地域にも歴史の面白さや文化財の価値が広がっていく。そんな素晴らしい取り組みに企画段階から参加できことを誇りに思いますし、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



後 記

『地域研究部報告 第7号』は、「歴史漫画『齋藤新五利治』の誕生 ～地域と高校生の協働～」の特集号である。

(1) 「月岡野の戦い」の検証と創作活動への応用に関する試論 ～歴史漫画『齋藤新五利治』の制作をめぐって～ 今回の一連の活動に関しまとめたレポートである。今年度、全国高校生歴史文化フォーラム（主催：徳島県立鳥居龍藏記念博物館）において優秀賞を受賞した。また、漫画制作と木曾川下りアイデアソンの活動をまとめた発表が、全国高等学校総合文化祭岐阜県大会地域研究部会で最優秀賞を受賞した。

(2) 齋藤新五利治の実像への思索 富加町教育委員会の島田崇正氏による論考。加治田城初代城主の佐藤忠能が典型的な在地領主であるのに対し、二代城主の新五は織豊期に顕著な職能的武将であったと指摘する。また、加治田が尾張・美濃から飛騨・越中に向かう要地にあった点に注目し、さらに史料をもとに新五が対上杉外交の担い手であったことにも言及している。

(3) 文献史料等に見る加治田城主齋藤新五利治 富加町役場の山内正明氏による史料解題。墓碑銘や文献史料に分析を加えつつ、加治田城主としての新五にアプローチを試みている。城主としての治績をうかがえる史料が少ない点や、江戸期以降も新五が領主であったことが伝承されている点に注目する。

(4) 姉小路氏城館跡と越中西街道について 飛騨市教育委員会の三好清超氏による資料紹介。織田家や齋藤新五とつながりのある姉小路氏の城館が宮川流域に展開していることから、宮川沿いの越中西街道こそが新五の行軍ルートであったと推測する。

(5) 『夕雲の城』プロジェクトの経緯と展望

2019年以降、富加町と関高等学校がどのような活動を行い、連携を深めていったかを回顧した上で、今後の展望や課題を指摘している。関連する過去の記事（関高等学校web掲載記事）を参考資料として付した。

関高等学校地域研究部の活動にはふたつの特徴がある。ひとつは地域連携を基本とした研究を地道に展開することであり、もうひとつは研究成果をまちづくりにつなげていくことにある。もちろん純然たる学術研究のあり方を否定するわけではないが、地域の協力なくしては高校生の校外活動は成り立たないし、学びの成果を地域と共有し、まちづくりへと生かす努力の中から、文化財の保全や活用に関する対話や知恵が生まれると考えるからである。2018年以来、地域との協働の中で、高校生たちはそうした経験をいくつか積み重ねてきた。

関市内の考古少年たちが、富加町の海老山（恵日山）遺跡で県下初の旧石器を発見して今年で70年を迎える。その少年たちがのちに関高等学校に入学し、社会研究部（現在の地域研究部）の中に、郷土史・考古学研究を持ちこんだと聞く。

旧石器と戦国。時代は異なるが、旧石器発見70年の節目の年に、富加の地で地域と連携した研究を行なっていることに、ある種の感慨や義務感、深い感謝の念を感じる。渡辺浩行先生をはじめ、研究仲間であり友人である島田さんや山内さん、三好さん、お世話になった皆様方に心より感謝申し上げる。 （林 直樹）

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第 7 号

発行：令和 5 年 3 月 日

発行所：岐阜県立関高等学校

岐阜県関市桜ヶ丘 2-1-1

電話 0575-22-5688

FAX 0575-23-7089

岐阜県立関高等学校地域研究部